

Japanese Institute of Landscape Architecture

学会広報

平成二十一年七月二十二日発行

第20巻・第1号

平成20年度日本造園学会北海道支部大会案内	4
〳 東北支部大会案内	5
〳 関東支部大会案内	7
〳 中部支部大会案内	8
〳 関西支部大会案内	10
〳 九州支部大会案内	11
<hr/>	
平成21年度全国大会案内—研究発表論文集の投稿申込について	1
造園夏期大学開催案内	2
シンポジウム案内	3
平成19年度北海道支部大会研究・事例報告発表会抄録	12
〳 東北支部大会研究発表会抄録	15
〳 関東支部大会事例・研究発表会抄録	17
〳 中部支部大会研究発表・事例報告会抄録	27
〳 関西支部大会研究・事例発表会抄録	33
〳 九州支部大会研究・事例報告発表会抄録	39

〈編集〉(社)日本造園学会事務局

〒150-0041 東京都渋谷区神南1-20-11 造園会館6F

TEL 03-5459-0515、FAX 03-5459-0516

平成 21 年度日本造園学会全国大会
—研究発表論文集の投稿申込について—

平成21年度ランドスケープ研究論文集（全国大会研究論文集、ランドスケープ研究第72巻5号）の投稿に関して、下記のように決定いたしましたので、会員の皆様にお知らせいたします。ふるってご応募ください。

1. 申込期間：平成20年8月28日（木）14時～平成20年9月11日（木）14時（電子申し込みによる）
2. 投稿期限：平成20年9月25日（木）（**必着・期日厳守**）
3. 提出先：(社)日本造園学会事務局「論文集委員会」
150-0014 東京都渋谷区神南1-20-11 造園会館6F
電話 03-5459-0515 FAX 03-5459-0516
4. 大会の開催日・場所：平成21年5月下旬 明治大学

投稿および電子申込に関する問い合わせは、

日本造園学会論文集委員会（幹事 [篠沢 kshino@osaka-geidai.ac.jp](mailto:kshino@osaka-geidai.ac.jp)）までお願いいたします。

平成20年度 第32回造園夏期大学開催要領

財団法人造園修景協会では、昭和52年以来、国土交通省の後援をいただくとともに、社団法人日本造園学会、社団法人日本公園緑地協会、社団法人造園建設業協会、社団法人ランドスケープコンサルタンツ協会の後援又は協賛をいただき、造園夏期大学を毎年開催し、今年で32回になります。

研修テーマも、最先端の技術や情報、最新の事例などを取り上げ、学者、行政官、専門家、事例担当者等の講師を迎え、講義と現地研修を行なうなど、参加者に対し、知識と技術の向上を図るよう努めてまいりました。今年も下記の開催要領により実施致します。多くの方々のご参加を期待し、ご案内致します。

1. 会 期 平成20年 8月20日(水)～22日(金)
2. 会 場 桐杏学園(東京都豊島区西池袋)
3. テー マ 「まちづくりとみどり・シリーズ」(第7回) - 緑の都市再生(5) -
4. 講義内容

日時	10:50	11:00～12:00	12:50～14:20	14:30～16:00
8/20 (水)	開講挨拶 (財) 日本造園修景協会 技術・事業委員長 樋渡達也	第1講義 緑にかかわる 国土交通省の施策 国土交通省公園緑地課 課長 小林 昭	第2講義 国営昭和記念公園「こもれびの里」 国営公園で官民協働により農村風景を再現しつつ、農村の伝統・文化・暮らしの知恵の体験を進めてきた貴重な実績と成果をうかがう。 国土交通省関東地方整備局 国営昭和記念公園事務所 所長 椰野良明	第3講義 最新の屋上緑化・壁面緑化技術事情 最近の注目すべき作品の紹介をはじめ、最新の屋上緑化・壁面緑化技術事情について関西にさきがけ賞審査委員長などをされている山田先生からうかがう。 和歌山大学システム工学部 環境システム学科 准教授 山田宏之
8/21 (木)	第4講義 グリーンプラザひばりが丘南の環境共生住宅団地の造園修景(平成19年度屋上緑化賞・環境大臣賞受賞作品) 屋上緑化・ビオトープ・隣接市立公園との一体化など、総合的造園修景モデル団地の整備や管理についてうかがう。 (独)都市再生機構 九州支社 九州公園事務所 所長 石田 晶	10:30～12:00	第5講義 東京ミッドタウンの緑の都市づくりとみどりの施工(平成19年度みどりの都市賞・国土交通大臣賞受賞作品) 巨木移植や新しいグランドカバーの開発など、特色あるみどりの施工やそれにかかわる課題などをうかがう。 イビデングリーンテック(株) 造園事業本部 技術・企画設計担当 直木 哲	12:50～14:20
8/22 (金)	現地見学 東京ミッドタウンの緑の都市づくりと造園修景 現地説明 イビデングリーンテック(株) 直木 哲 根崎賢治	10:30～12:30	午後自由見学とする。 六本木ヒルズ 愛宕グリーンヒルズ 品川グランドcommons 汐留シオサイト 周辺の緑の都市再生事例	14:30～16:00

注: 講義内容は都合により変更することがございます。

5. 募集人員 80名
6. 参加費 修景協会会員・造園学会会員 23,000円
非会員 27,000円
7. この研修会は造園CPD制度の対象となります。
※申し込み等については協会本部へ 電話03-3262-5730 FAX 03-3262-5767

第 31 回水環境シンポジウム「水辺のまちづくり ～住民参加の親水デザイン～」

近年、住民参加型のまちづくりや水環境整備が重視されてきています。これまで私たちは、建築と都市・地域に存在する水辺空間をまちづくりに取り込むための方法論を親水工学の視点から調査研究してきました。そして、水辺のもつ多面的な効用や、水環境整備計画を実践していく具体的な手法を、より広く啓蒙することが重要であると考え、「水辺のまちづくり～住民参加の親水デザイン～」を刊行しました。そこで、水辺を中心としたまちづくりに先駆的に取り組んでいる「水の都ひろしまプロジェクト」の実践ノウハウを学び、また各地で実践されているまちづくり事例の検証を行うことで、今後のまちづくりのあり方を考える場を設けました。水に関心のある一般市民の方々、まちづくりに関わる行政関係者、建築・都市計画に携わる実務者の方々の有意義な交流の場になればと思います。

主催 日本建築学会 環境工学本委員会 水環境運営委員会 水と都市小委員会

後援（予定） 環境情報科学センター、空気調和・衛生工学会、土木学会、
日本建築家協会、日本造園学会、日本都市計画学会、日本水環境学会、
リバーフロント整備センター

日時 2008年9月4日(木)13:00～17:00

会場 建築会館ホール（東京都港区芝5-26-20）

<プログラム>司会 畔柳昭雄(日本大学)

第1部 基調講演「水の都ひろしまプロジェクト～リバーサイド・カフェの社会実験～」

新上敏彦(広島市役所)

第2部 水辺のまちづくりの実践

- | | |
|------------------|----------------|
| (1) 人間の親水行動 | 渡辺秀俊(三洋テクノマリン) |
| (2) 源兵衛川暮らしの水辺 | 岡村晶義(アトリエ鯨) |
| (3) 親水公園と景観まちづくり | 上山肇(東京都江戸川区) |
| (4) 防災空間としての水辺 | 坪井壘太郎(明治大学) |
| (5) 洪水対策と親水空間づくり | 市川尚紀(近畿大学) |
| (6) 河川の多様な利活用 | 大橋南海子(まちづくり工房) |

総括 村川三郎(広島大学)

定員 150名

参加費 (資料代含む・当日お支払い下さい)

会員 1,000円 後援団体会員 1,000円 会員外 1,500円

登録メンバー 1,000円 学生 500円

参考書籍 「水辺のまちづくり ～住民参加の親水デザイン～」(2008年9月刊行予定)

申込方法 E-mailにて「催し物名称、会員番号、氏名、勤務先・所属、電話番号、メールアドレス」を明記の上お申し込みください。

申込・問合せ 日本建築学会事務局 研究事業G 大野 (E-mail: ono@aij.or.jp)

平成20年度 日本造園学会北海道支部大会案内

標記の大会を下記のとおり開催いたします。ご参加、お待ち申し上げます。

(社)日本造園学会北海道支部

■開催日：平成20年8月29日（金）

■場 所：アルテピアッツァ美唄（北海道美唄市落合町栄町）

<http://www.kan-yasuda.co.jp/arte.html>

■テーマ：北海道の風景（北のランドスケープ）（仮題）

■日 程

受付

1. 研究・事例報告会
2. ポスターセッション
3. 北海道学生セッション
4. 北海道支部総会
5. シンポジウム
6. エクスカーション

■参加費（平成19年大会を参考、詳細は未定）

資料代500円、事例報告集（資料含む）2,000円（学生1,000円）

■申込方法

1) 参加を希望される方：

ホームページからの申し込みのほか、当日直接会場にても参加申し込みが可能です。

2) 資料代等、参加費につきましては当日にお支払い願います。

■詳細などはホームページを御参照下さい（詳細がわかり次第随時更新します）。

<http://www.jila-hokkaido.com/>

◇問い合わせ先：日本造園学会北海道支部事務局

〒097-0197 美唄市美唄1610-1 専修大学北海道短期大学みどりの総合科学科内

Tel&Fax:0126-63-0228

E-mail:info@jila-hokkaido.com 担当：岡田

平成20年度 日本造園学会東北支部大会案内

平成20年度の東北支部大会を開催します。皆様の参加をお待ちしております。

参加費や詳細につきましては、決定次第、学会ホームページを通してお知らせ致します。

(社)日本造園学会東北支部

■テーマ：自然公園の保全と管理

■場 所：青森大学（青森県青森市）

■日 程：8月30日～31日

【8月30日（土）】

・受 付：11：45～

・総 会：12：30～13：00 ※12：00～12：30は幹事会を開催します。

・大会開会：13：15

・基調講演：13：30～14：30

題 目：国立公園内における野生動物の管理問題

講 演 者：藤田 均（青森大学大学院環境科学研究科長）

・シンポジウム：14：45～16：45

テーマ：国立公園特別保護地区内を通る歩道の安全管理問題—落枝の防止は管理上どこまで行うべきか—

パネリスト：小笠原哲男 氏（蔦温泉売店、元自然公園指導員の会会長）

桜庭 正行 氏（青森県環境生活部自然保護課主査）

斎藤嘉次雄 氏（青森県樹木医会事務局長）

コーディネーター：藤田 均 氏

・ポスターセッション：17：00～18：00

・懇親会：19：00～21：00（青森市内ホテル）

【8月31日（日）】

・エクスカージョン

J R青森駅9：00→青森大学→八甲田・奥入瀬（幾つかの候補から今後決定）→酸ヶ湯→青森大学→

青森駅15：30頃

備考

*国立公園内を散策しますので運動靴等でお出で下さい。

*酸ヶ湯でバスを降り、20分ほど歩いたところにある青森大学のキャンプ場で、8月31日（日）に一泊する計画があります。ここは新湯という温泉ですが、電気、ガスなどはありません。寝袋持参でバンガロー宿泊の予定です。申し込みについては後日ホームページでご案内します。

■ポスターセッション申込要項

作品のサイズはB1、枚数は2枚以内とし、縦づかいとします。展示に際しては、紙のまま枠にピン止めとするので、その旨ご了解ください。提出は筒に入れて下記宛先に、8月13日（水）必着で送付してください。

作品提出先：青森大学大学院 環境科学研究科長 教授 藤田 均

〒030-0943 青森県青森市幸畑2-3-1

電話017-738-2001（内線763）

また、要旨を当日資料に掲載します。原稿はA4用紙片面を用いて本文・図・表・写真等をレイアウトしてください。余白は上下23mm以上、左右15mm以上とします。本文のうえに表題（40字以内）、著者名、所属を記し、1行29字×58行×2段の書式見本に従いワードで執筆のうえ、8月13日（木）までに下記宛先までEメールで送付してください。

日本造園学会東北支部事務局 岡本 一郎 E-mail ichirou_okamoto@city.sendai.jp

作品の返却を希望する場合は、送付の際筒のなかに、必要事項を記入のうえ返信用の宅急便着払い用紙を同封すること。

■問い合わせ先

〒982-0215 仙台市太白区旗立2-2-1 宮城大学食産業学部内

日本造園学会東北支部 支部長 森山雅幸

TEL. 022-245-1422 FAX. 022-145-1534

平成20年度 日本造園学会関東支部大会案内

■開催月日：平成20年10月11日(土)、12日(日)

■開催場所：東京大学農学部

■日 程：

詳細については、日本造園学会ホームページ (<http://www.landscapearchitecture.or.jp/>) および日本造園学会関東支部ホームページ (<http://nodaiweb.university.jp/nkbjila/>) にてご案内します。

(1)事例・研究発表会 (2)ポスターセッション (3)支部総会 (4)デザインワークショップ『サマースタジオ 2008「空地」のデザイン』 (5)シンポジウム (6)懇親会

■大会参加費(予定)	参 加 費 会 員 (賛助会員を含む)	3,000円
	会 員 外	4,000円
	学 生	1,500円
	懇親会費 一 般 (学生以外)	4,000円
	学 生	2,000円

(いずれも当日、受付にてお支払いください。)

■事例・研究発表の申し込み

事例・研究発表を希望される方は、8月31日(日)までにE-mail、FAXまたは郵送のいずれかにより、関東支部事務局までお申し込みください。申し込みには①発表者名(所属)、②発表題目(原稿提出時に変更可能)、③発表形式(口頭発表またはポスター発表)、連絡先(郵便番号、住所〔職場か自宅かを明記〕、電話番号、FAX番号、e-mailアドレス)をお知らせください。

申し込み後、関東支部事務局より送付される執筆要領にしたがって発表要旨(口頭発表：A4サイズ2ページ〔4,000字程度〕、ポスター発表：300字程度)を作成し、9月16日(火)必着で関東支部事務局宛に送付してください。

発表登録料は発表1件につき3,000円です。9月30日(火)までに指定口座にお振り込みください。

■問い合わせ・申し込み

日本造園学会関東支部事務局(担当：三島孔明)

〒271-8510 千葉県松戸市松戸648 千葉大学園芸学部 緑地・環境学科内

TEL&FAX 047-308-8898 E-mail koumei@faculty.chiba-u.jp

平成20年度 日本造園学会中部支部大会 開催案内(第1報)

標記大会を下記の要領で開催いたします。会員各位のご参加をお待ち申し上げます。

(社)日本造園学会中部支部

■開催日：平成20年11月8日(土)～9日(日)

■場 所：名古屋市立大学芸術工学部 (〒464-0083 名古屋市千種区北千種2-1-10)

■日 程：

〈第1日目(11/8(土))〉見学会(ノリタケの森・名古屋城二の丸庭園・徳川園) ……10:00～17:00
(集合9:50 名古屋駅市バスターミナル2Fレモンホーム0番乗り場)
名古屋観光ルート乗合バス「メーグル号」を利用します。

懇親会(会場：ガーデンパレス徳川園) ……18:00～20:00

〈第2日目(11/9(日))〉研究発表・事例報告(口頭発表・ポスター発表) ……9:30～12:00

幹事会 ……12:30～13:00

支部総会 ……13:00～13:30

公開シンポジウム ……13:30～16:30

(鶴舞公園開設百周年・生物多様性条約第10回締結国会議(COP10)など、講演者未定)

■参加費 大会参加費(資料代)：3,000円(学生1,000円)

※公開シンポジウムは参加無料です。

見学会参加費：1,640円

(内訳) 土日エコ切符(市バス地下鉄1日乗り放題)600円(メーグル1DAYチケット(500円)はメーグル号のみ利用可)、割引入場料(ノリタケの森・名古屋城は各400円、徳川園240円)。なお、徳川美術館・蓬左文庫割引観覧料1,000円は希望者のみ。

車の方は、名古屋市立大学芸術工学部受付で「臨時駐車許可証」を受けた後、大学前の萱場(かやば)バス停から市基幹バス「名古屋駅」行きに乗って土日エコ切符を購入してください(乗車約30分)。

懇親会費：7,000円(学生は2,000円)

■参加申し込み

〈見学会・懇親会の申し込み〉

下記の①～⑤の項目を明記の上、EメールまたはFAXでお申し込み下さい。

申込み締切り：11月1日(水)

送 付 先：(Eメール) dra@sda.nagoya-cu.ac.jp

件名に必ず「造園中部」の文字を入れて下さい。

(FAX) 052-721-3110(「岡村宛」を明記して下さい。)

記 載 項 目：①見学会・懇親会の別

②参加者名

③所 属

④連絡先電話番号

⑤Eメールアドレス

〈研究発表・事例報告の申し込み〉

下記の①～⑤の項目を明記の上、EメールまたはFAXでお申し込み下さい。

申込み締切り：9月1日(月)

送 付 先：(Eメール) dra@sda.nagoya-cu.ac.jp

件名に必ず「造園中部」の文字を入れて下さい。

記 載 項 目：①発表タイトル

②発表者名と所属(連名可、代表者に○)

③発表代表者の連絡先(電話番号、Eメールアドレス)

④希望する発表形態(口頭・ポスター)

⑤発表内容の要旨(300字以内)

※発表には、発表者(連名の場合は筆頭者)が造園学会会員であることが必要です。

※口頭発表の発表時間は(発表10分+質疑応答5分)の計15分です。

※申し込み状況や発表内容によっては、発表形態の変更をお願いする場合があります。

※発表を申し込まれた方は、発表形態に関わらず10月10日(金)必着で、発表要旨原稿(MS-wordかpdfファイルで、使用フォントはMS-明朝及びMS-ゴシックのみ、その他のフォントはアウトライン化して下さい)をEメールでdra@sda.nagoya-cu.ac.jp宛添付してお送り下さい。その際、件名に必ず「造園中部」の文字を入れて下さい。詳細は「発表要旨作成要領」(下記サイトにあります)をご覧ください。

<http://www.sda.nagoya-cu.ac.jp/okamura/>

※口頭発表者には、申し込み後、発表方法を連絡します。

※ポスター発表者には、申し込み後、発表方法を連絡します。

■会場へのアクセス (<http://www.sda.nagoya-cu.ac.jp/top.html>をご参照下さい。)

【名古屋駅からバス】市バスターミナル2階7番のりば、市バス基幹2「光ヶ丘、猪高車庫」行→「萱場(カヤバ)」下車すぐ(乗車時間：約30分)、他

【タクシー・徒歩】地下鉄東山線池下駅(H14)西改札口から「ナゴヤドームの南の萱場(カヤバ)の名古屋市立大学芸術工学部へ」と言って下さい(約5分)。徒歩は北へ約15分(途中の愛工大名電高から約5分)。

■問い合わせ先

平成20年度日本造園学会中部支部大会 運営事務局

E-mail: dra@sda.nagoya-cu.ac.jp (件名に必ず「造園中部」の文字を入れて下さい。)

電 話：052-721-3209 (直通)、

F A X：052-721-3110 (学部事務室、「岡村宛」とお書き下さい)

住 所：〒464-0083 名古屋市千種区北千種2-1-10、名古屋市立大学芸術工学部内

担 当：岡村 穰 (問い合わせは可能な限りEメールでお願いします)

平成20年度日本造園学会関西支部大会（大阪）案内（第1回広報）

標記の大会を下記のとおり開催いたします。会員各位多数のご参加をお待ちしております。関西地区以外の方々もご参加ください。

■開催月日：平成20年10月25日（土）～10月26日（日）

■開催場所：大阪市

◆25日・26日：ドーンセンター（大阪府立女性総合センター）

（大阪市中央区大手前1丁目3番49号、京阪天満橋駅、地下鉄谷町線天満橋駅から徒歩約350m）

■日 程：

〈第1日目〉10月25日（土）

- ・学会井戸端会議（仮称）次のパブリックスペースの担い方の可能性
- ・懇親会

〈第2日目〉10月26日（日）

- ・研究・事例発表セッション（口頭発表、ポスター発表）
- ・幹事会
- ・総会

■参加費用：大会参加費（一般）3,000円（学生）1,000円 懇親会費（一般）5,000円（学生）2,000円

■参加申込：

〈研究・事例発表の申込〉：

以下の1)～6)の項目を明記の上、9月30日（火）までに、下記の支部事務局あてに、メールまたはFAXで申し込んでください。（できる限りメールにてお願いします。）

- 1) 著者名、所属（発表者の名前の先頭に○をつけておいてください）
- 2) 希望する発表形態（口頭またはポスター）
- 3) 発表タイトル（日本語および英語）
- 4) 発表内容のキーワード（日本語および英語、各3～5）
- 5) 発表内容の要旨（300字以内）
- 6) 連絡先（メール、ファックスおよび電話）

- ・口頭発表およびポスター発表の発表時間配分は、申込件数に応じて調整します。
- ・申込状況や発表内容によっては、発表形態の変更をお願いする場合があります。
- ・口頭発表を申し込まれた方には、9月30日（火）必着で、発表要旨集の原稿A4・2頁の提出をお願いします。
- ・ポスター発表を申し込まれた方は、当日（10月25日（日））、会場へ直接ポスター（パネルまたは紙）をお持ち下さい。なお、ポスター1件の割り当てスペースは、幅90cm・高140cm程度を予定しています。
- ・口頭発表については、3～5報のセッション制でディスカッション時間を設けます。
- ・ポスター発表では、指定された時間にポスターの前でのプレゼンテーション、質疑応答をお願いします。
- ・申込時の内容を大会報告等としてデータ提供する予定です。

〈懇親会の申込〉：10月17日（金）までに下記事務局までお申し込みください。

■申し込み・問い合わせ先：

〒606-8502 京都市左京区北白川追分町 京都大学大学院農学研究科環境デザイン学研究室内

日本造園学会関西支部事務局（担当：今西純一）電話：075-753-6099、FAX：075-753-6082

メール：imanishi@kais.kyoto-u.ac.jp

ホームページ：http://www.landscape.kais.kyoto-u.ac.jp/jila_w/annai.html

平成20年度 日本造園学会九州支部大会案内

標記の大会を下記のとおり開催いたします。会員各位の研究・事例報告の発表ならびに大会へのご参加をお待ちしております。

(社)日本造園学会九州支部

- 開催月日：平成20年11月21日（土）～23日（日）
- 開催場所：名桜（めいおう）大学（名護市内）（住所：〒905-8585 沖縄県名護市字為又1220-1）
- 大会テーマ：「歴史と風土を活かした美ら（ちゅら）街づくり」
九州支部大会統一テーマ「かなたの自然と身近な共生景観」

■日 程

- 〈第1日目〉11月21日（金）
造園学会九州支部幹事会（会場名護市内）16：00～18：00
- 〈第2日目〉11月22日（土）（内容時間は予定）
- | | |
|-----------------|-------------|
| 研究・事例報告（口頭発表） | 9：00～12：45 |
| 昼食 | 12：45～13：45 |
| 研究・事例報告（ポスター発表） | 13：45～14：15 |
| 基調講演 | 14：30～15：30 |
| シンポジウム | 15：40～17：30 |
| 交流会 | 18：00～20：00 |
- 〈第3日目〉11月23日（日）
テクニカルツアー（行先・時間は予定）

- 最新情報支部大会の最新情報は、下記のWEBサイトをご覧ください。

<http://www.qzouen.jp/>

■研究・事例報告の申込み

研究・事例報告会で発表（口頭もしくはポスター）を希望される方は9月12日（金）までに、電子メール、または郵送・FAXのいずれかにより下記、支部事務局までお申し込みください。申し込みには、①発表者名（所属）、②発表題目（原稿提出時に変更可）、③発表形態、④連絡先（住所、電話、e-mail、FAX）をお知らせください。

研究・事例報告集の原稿は、申し込み後、送られてくる投稿・執筆要領にしたがって作成し、[A4判2ページ（4000字程度）]、10月10日（金）必着で、投稿・執筆要領が指定するあて先に送付してください。掲載料は、1報告につき3,000円です。

- ◇問合せ・申込み 日本造園学会九州支部事務局（担当：朝廣和夫）

〒815-8540 福岡県福岡市南区塩原4-9-1

九州大学芸術工学研究院環境計画部門 内

TEL/FAX 092-553-4480 E-mail qzouen@design.kyushu-u.ac.jp

口頭発表**1. 丸瀬布遠軽道路における景観検討**

太田 広 (国土交通省遠軽道路事務所)
高規格幹線道路、旭川紋別自動車道の一部である丸瀬布遠軽道路 (丸瀬布～豊里間、延長約18km) は、構想段階から設計段階にある。有識者や地域の代表者等で構成される「景観検討ワーキンググループ」では、丸瀬布遠軽道路の内部景観及び外部景観について、フォトモンタージュ及びコンピュータグラフィックスにより、夏季及び冬季における景観を予測し、現在の景観や優良事例と比較検討を行った。本稿では、景観検討の経過や検討結果について報告するとともに、今後の課題として、景観整備に対する費用対効果を検討するための景観価値の定量的な把握、評価手法の確立の必要性を指摘した。

2. 空知地域の炭鉱跡地に対するランドスケープからのアプローチ

小林昭裕 (専修大学北海道短期大学)
旧産炭地の景観は、歴史的に地域産業と不可分の関係のもとに形成された。地域経営の視点から、炭鉱関連施設の社会的意味を再評価し、ランドスケープの役割を論議することは、道内の多くの市町村に参考となる点が多い。負の評価が社会的に定着している炭鉱関連施設の保全と活用を通じ、地域活性化方策を検討するには、従来とは異なる視点が要求される。地域経営の手段として、炭鉱跡地をランドスケープの視点からアプローチするには、炭鉱関連施設と地域社会との関わりを把握し、立地条件を踏まえ、計画上の主軸の設定、および課題への視座を明確にする必要がある。本研究では、主軸及び視座の設定について、既往研究を参考に、試論を提示する。

3. 斜里町ウトロを事例としたゲートウェイコミュニティにおける観光客と地元住民の景観意識の把握

酒井翔平 (北海道大学大学院農学院)
近年、自然観光地に隣接する街ゲートウェイコミュニティは無秩序な開発が問題視されており、観光客と地域住民の意向を踏まえた景観形成が求められる。そこで、知床国立公園の斜里町ウトロを対象に、両者の現状のウトロの景観に対する評価及び望む姿

を把握し、景観形成の方向性を見出すことを目的とした。知床らしい雰囲気を感じるものは、観光客は断崖、海、山並み、森林、野生動物で、地元住民は加えて市街地内の岩を挙げた。知床らしい雰囲気を損なっているものは、観光客は看板・のぼり、地元住民は加えて宿泊施設の大きさ、路上駐車を指摘した。ウトロに望む姿としては自然と調和した景観が両者共に求められていた。

4. 海外の事例から見た海岸域におけるオフロード車の乗入規制について

松島 肇 (北海道大学大学院農学研究院)
砂浜海岸ではオフロード車の利用による自然環境悪化や他の利用者との軋轢が顕著になり、対策が求められている。本研究では、アメリカの事例を調査分析することにより、わが国の砂浜海岸におけるこのような利用管理のあり方について検討することを目的とした。アメリカにおいては、砂浜海岸におけるオフロード車の利用に関しては既に一定のルールが確立しており、保全と利用に配慮したアダプティブ・マネジメントが行われていた。我が国においても、改正海岸法を運用した砂浜海岸の利用規制が行われてきたが、利用と保全に配慮した管理のためにはルールづくりや生態系への配慮といった課題も明らかとなった。

5. 道立自然公園野幌森林公園利用者の動機と来訪形態からみた都市近郊林のレクリエーション利用の特徴

貝瀬真緒 (北海道大学大学院農学院)
都市近郊林は、都市住民の健康維持のための適度な運動を行う身近な空間として需要が高まると考えられる。本研究では都市近郊林の利用者の動機と来訪形態の関係からレクリエーション利用の特徴を明らかにすることを目的に、道立自然公園野幌森林公園の来園者を対象に意識調査を実施した。その結果、年間を通じた利用や来園時間帯が集中しており、混雑を感じたことのある利用者も存在した。一部の利用者にはコーピング行動がみられた。また来園動機の重要度による因子分析の結果から「自然観察」「非混雑」「健康維持」の3つの因子を得た。年齢や居住地により因子得点が異なり、様々な来園動機を持っていることが示された。

6. 住宅地の価格形成と居住地選択における公園緑地の効果に関する研究

愛甲哲也（北海道大学大学院農学研究院）

住宅地における公園緑地は、レクリエーションの場や景観・街並み形成など様々な効果をもつ。本研究では、札幌市およびその近郊を事例として、環境経済学的手法により公園緑地が地価に及ぼす効果および、居住地選択に与える効果について把握することを目的とした。ヘドニック法により、札幌市の住宅地の地価公示価格を、最寄の公園面積や周辺の緑地率が增加させていることが示された。また、野幌森林公園周辺住民は、選択型実験の結果より、居住地の選択において、緑がみえ、公園により近く、より大規模な公園がある場所を好んでいることが明らかとなった。

7. 北海道石狩浜におけるハマヒルガオ個体群の再生

山田啓介（北海道大学大学院農学院）

石狩浜砂丘での植生回復を目的に、苗移植によるハマヒルガオの導入を試みた。2004年10月に苗の大きさと植栽密度を変えた処理区を設け、11月から4月までネットで覆った（ネット有区）。一部の処理区ではネットで覆わない区（ネット無区）も設けた。ネット無区では2005年5月に全個体が枯死していたが、ネット有区では全処理区で70%以上が生存しており、2007年6月に被度が20%以上となった。このことからハマヒルガオの苗を定着させるには、冬期の強風による砂の移動を抑える必要があると考えられた。また、ネット有区では2006年に0.0~2.3個/m²、2007年に7.0~16.3個/m²の開花、結実が確認できた。

8. 住宅地における小学校の環境教育と連携したどんぐり緑化に関する研究

内田奈穂子（室蘭工業大学大学院）

本研究では、どんぐり緑化を小学校の環境教育の一環として住宅地で実施することによる、環境教育及び緑化に対する効果や可能性について検討することを目的とした。主な結果として、どんぐり緑化が小学校の環境教育プログラムとして期待されていること、教員が環境教育に必要と考える内容とどんぐり緑化に期待する効果が一致していること等が把握

された。教員はどんぐり緑化が住宅地で実施されることに関して懸念している一方で、地域住民は小学校の環境教育に対して肯定的であるということから、どんぐり緑化に対しても肯定的であること等が把握された。

9. 街路樹ニセアカシアの外部損傷と内部腐朽について

石井弘之（北海道立林業試験場）

街路樹として植栽されているニセアカシアの外部に現れた損傷と内部の腐朽との関係を調査した。幹における木部の露出は内部腐朽とは結びついていないこと、地際における溝状の樹皮の巻き込みがあるものは芯腐れが起きていること、キノコは発生地点付近で大きな腐朽が広がっていることを示している、という特徴が明らかになった。ただし、樹木の腐朽は立地条件、発生原因、感染する菌の種類や経過年数等により広がり方が異なり、今回整理した類型に当てはまらない例も多く見られることから、更に内容を整理していくことが求められる。

10. 学校を事例とした緑視率からみた屋上緑化の評価について

岡田 稔（専修大学北海道短期大学）

屋上緑化のもつ機能のうち景観向上機能に着目し、緑視率の違いが人の評価に与える影響を確認することを目的とし、学校を事例としたシミュレーション写真による景観評価実験を行った。シミュレーション写真は緑化の構成要素として芝生のみを使用し、背景あり2パターン、背景なし14パターンの計16種類を用いた。その結果、全般的に緑視率が高い写真で評価が高いことが確認され、緑視率が高まるにつれデザインによる評価や有意差に変化はみられなくなった。また、デザインの違いが評価に影響を与えることも確認され、デザインによっては緑視率の違いによる有意差がなく、緑視率の影響が少ない場合があることが確認された。

11. 風景デザイン行為における「実践」の文化人類学的試論

片桐保昭（北海道大学大学院文学研究科）

「風景」の表現における審美的な価値観を「風景」

が構築される社会過程として記述するため、ランドスケーププロジェクトにおけるデザイン過程を文化人類学的手法であるアクターネットワークの形で整理した。既存の「科学技術」では評価できない形態は、主観的として排除されるように見えるが、デザイナーは合理性を装って「実践」する。顕著な例としてモダンデザインを模倣した「ハイスタイルな」形態がデザインされる過程を考察した。社会における意味の拘束は重要な要素として風景中の中心的な位置を占めるが、意味が地位出来ない「審美」感覚は重要ではない周辺の要素として積極的な環境ノイズとしてデザインされることを明らかにした。

12. 都市公園における不法投棄発生の現状および発生誘因に関する考察

椎野重紀夫（北海道工業大学）

本稿は札幌市における不法投棄発生の現状を整理した上で、特に都市公園内およびその周辺で発生している不法投棄事例に注目してその原因を考察することを研究目的とした。札幌市内の都市公園2595カ所をGIS上でポリゴンデータとして作成し、不法投棄発生地点との位置関係について解析した結果、都市公園に近接する不法投棄地点は合計105件見られた。都市公園の中には不法投棄が集積しやすい公園があることが事例として見られ、公園単体でなく接道条件や隣接土地利用条件が不法投棄を誘発させていると考えられることから、都市公園を一要素とする地域空間全体での改善策を検討する必要がある。

ポスター発表

1. 実務報告4作品—地域再生を目的としたランドスケープ・プロジェクト—

山田 良（札幌市立大学デザイン学部）

「くまもとアートポリス事業」（2001年 熊本県）、「大地の芸術祭・越後妻有アート・トリエンナーレ事業」（2003年、2006年 新潟県）、「十勝千年の森プロジェクト」（2007年 北海道）におけるランドスケープもしくはランドアートのプロジェクトについて、そのプロセスを含めた設計4作品の実務報告としてポスターにまとめたものである。これらの各プロジェクトにおいて、敷地の調査分析、地域の特色を活かした材料の選定、実施詳細設計、完成後の

メンテナンス計画に至るまで携わった。また地域でのワークショップや協同の施工作业を全体計画にとりこみ、地域住民による参加型プロジェクトとして実践した。

2. 宮城県松島における養殖筏からみた食と景観との関わりについて

星 美幸（宮城大学食産業学部）

宮城県松島は日本三景の一つであり、多くの島からなる多島景観を観光客がその景観を楽しんでいる。それと同時に松島湾は日本でも有数のカキ養殖生産地でもある。よってそこには多島景観による観光の場と養殖筏を主体とした食生産の場としての景観が成立している。そこで本研究では養殖筏のある景観に着目し、現状の把握として空中写真による平面的な把握、江戸時代より景観鑑賞の場として利用されていた「四大観」からみた養殖筏の可視状況の把握を行い、観光客の養殖筏への景観としての評価を把握するためのアンケート調査を行った。そしてこれら結果より養殖筏を景観として捉えた場合の現状と評価について検討した。

ポスター発表

1. 小学校における環境教育のためのエコロジカルランドスケープ

～栗生小学校ビオトープを事例として～

増田豊文（東北文化学園大学科学技術学部）

地球規模での自然環境破壊が進行する中、文部科学省・環境省を中心に、学校における環境教育を推進するための政策がとられ始めている。その基盤整備として、教育施設の屋外空間を、子供達の環境学習の場として創出していくことが、急務である。そのためには、施設の外構計画に、身近な野生生物と触れ合えるような棲息域を設け、屋外空間を自然化するという新たな視点を加えていかなければならない。今回の発表では、仙台市栗生小学校に設置された学校ビオトープの創られた経緯や、その内容を事例紹介する。さらに、ビオトープ設置が子供達に与えた影響について、調査結果の一部をとりあげ、ビオトープの設置効果・意義について検証する。

2. 新潟市「佐潟」における循環型の環境づくりについて

太田和宏（新潟工科大学大学院自然社会環境システム工学専攻・博士前期課程）

近代農法の普及や農地拡大が進むにつれ、潟は埋め立てられ水田化や宅地化が進んだ。しかし、それまでの数百年間、潟が消滅しなかったのは、地域の人々と直接的に生活の中で人々は手を入れていたために維持・保全されたということの意味している。今後、造園や土木といった自然環境を扱う分野は、地域の“先人の知恵”を十分に理解し、考慮しながら計画をすることが必要であるとともに、自然環境だけをつくるのではなく、人間環境もつくり、地域の人々が日常生活の中で関われるような環境づくり（自然環境・人間環境）の両方の計画を目指すことを提案したい。

3. 広瀬川中流域、仲ノ瀬橋から竜ノ口溪谷区域における河川環境保全に関する研究

佐々木直子（株式会社日比谷花壇）

森山雅幸（宮城大学食産業学部環境システム学科）

都市化に伴う人工的な河川整備は、水辺の多様な生き物たちの生活環境を急激に減少させてきてい

る。また、河川での事故や犯罪の増加により「川は危険な場所」という認識が高まり、子供たちは遊び場として魅力的な水辺空間から遠ざかった生活を強いられるようになってきた。本研究は、自然河岸段丘や植生等の貴重な自然的環境が残る数少ない都市河川である広瀬川を対象地として制作した平成16年度卒業プロジェクトを、新橋梁建設等による計画条件の変化に応じた河川環境保全計画のあり方を再検討し、計画見直しのためのデザインプロセスについて検討することを目的としたものである。

4. ランドスケープデザインが生む環境認識の契機

渡部 桂（東北芸術工科大学デザイン工学部）

ランドスケープデザインの過程は、地域の環境を認識し理解する契機となる。その機会として「豊かな体験活動推進事業」（文科省）を活用し、中学校の花壇整備をプログラムした。地域性の読み解きとその反映、場所性の表現を花壇整備の理念とし、①読み解いた環境を関係者に伝える（講義の実施、コンセプトブックの作成）、②地域性を意匠に表現する（敷地周辺の畑から出た石の利用、畑をモチーフとした意匠）、③生徒が施工を体験する（既存植栽の移植、既存施設の解体・撤去、掘削や材料運搬、石の敷設）、④花壇を広く利用する（食し観賞できる植栽、敷地に残る雑木林の落葉を堆肥化し投入）ことを計画・実施した。

5. 都市の中の農空間に関する事例的研究

森山雅幸（宮城大学食産業学部環境システム学科）

渡邊 崇、佐久間陽子、後藤真実

（宮城大学事業構想学部デザイン情報学科）

本研究は、都市生活環境における「農」との触れ合いがコミュニティ意識の形成、食育の推進、社会福祉活動など人々の暮らしに様々な効能をもたらしていることに着目し、子供から高齢者までだれもがまちなかの身近な場所で「農」と触れあうことができる農空間づくりの可能性と住民参加型の農的土地利用デザインプロセスの研究を目的としたものである。「まちなか農園づくり」は、食生活や食の安全性への関心が高まる現代社会の中で限られた都市空間におけるクリエイティブな未利用地の活用であり、地域住民・大学・行政の協働による新たな都市緑地の取組みになることが考えられる。

6. 指定重要文化財建造物「渡邊邸」の建築と庭園の関係性に関する一考察

五十嵐佑 (新潟工科大学大学院自然・社会環境システム工学専攻・博士前期課程)
油浅耕三 (新潟工科大学大学院)

庭園の構成内容に関する研究を見る時、従来、浄土式や回遊式といった庭園形式とか、夢窓国師・小堀遠州といった作庭家とその作風、鶴石・亀石といったような特色ある石組みや名石・奇石などが上げられ紹介されることが多い。本考察では、渡邊邸の築山の植生種が、落葉樹と常緑樹とを組み合わせ、四季の変化や風の流れを取り込んでいるといった計画的側面や、他の庭園と比較考察する視点で、庭園の敷地面積に対する大座敷からの視角内面積、園路長や橋の長さや幅、高木数等を算出してその実状を把握するとともに、併せて、個々の庭園の特色を数値の違いとしてみようとしたものである。

7. 宮城県松島における養殖筏からみた食と景観との関わりについて

岡田 穰
(専修大学北海道短期大学みどりの総合科学科)
星 美幸 (宮城大学食産業学部)

宮城県松島は日本三景に数えられた景勝地であると共に、国内有数のカキ養殖生産地として多くの養殖筏が存在し、多島景観による観光の場と食生産の場という両面の景観が成立している。本研究では湾内からの景観および湾外からの景観として松島四大観から見た食生産場としての景観の現状と評価について把握することを目的とし、既存文献調査、写真調査、アンケート聞き取り調査を行った。その結果、松島において養殖筏の景観は評価としても受け入れられており、陸地で言う農地景観と同様に評価できる。今後は養殖筏のある景観を「食の景観」と位置づけし、松島の食産業の紹介として観光的な価値を持たせることが有効であると考えられる。

8. 畜産施設の臭気緩和および景観向上のための緩衝樹林帯の検討

斉藤友彦 (小岩井農牧株式会社技術研究センター)
畜産施設からの排出物質の周辺樹林への影響について把握するため、隣接樹林の有無および距離別に、林外雨、林内雨、樹幹流、樹幹流圏土壌の化学組成

および臭気を調査した。隣接樹林区各項目の濃度は、林縁で最大、樹林内で漸減し、臭気は林内で消滅した。隣接樹林無区各項目の濃度の距離による漸減傾度は前者よりも小さかったので、隣接樹林による捕集効果が示唆された。また、日陰樹(林)の家畜接触からの保護柵の有効性について把握するため、柵内外の土壌理化学性を調査した。物理性は柵内が柵外に比べ固結が少なく土壌空隙が維持されていた。化学性各項目は柵内外の差が認められず、現形状、地表勾配では糞尿の流入が考えられた。

9. 日本とオーストリアの戸外活動の比較調査

青木陽二 (独立行政法人国立環境研究所)

異なる気候風土と文化をもつ民族は、外部空間に対して、異なった対応をしているものと考えられる。このことは人間の環境に対する異なった行動や考え方を生み出していると思われる。今まで世界各地の人間の行動に漠然とした違いがあることを人々は知っていたが、これを計量化して測定することはなかった。屋外空間利用の違いを計測し、定量的に明らかにすることにより、環境に対する人間行動の差を実証するものである。日本では19ヶ所、オーストリアで8ヶ所の調査場所を設定した。日本側では沖縄から北海道に至るまでの戸外活動に関する既存のデータを収集した。北海道、茨城、東京、沖縄の調査地点が決まった。

10. 地域美しくなれば人の心も美しくなる

三浦顯兒 (むつみ造園土木株式会社)

近年企業の社会的責任として地域貢献活動がクローズアップされてきた。企業の利益追求に偏った活動は市民からの同意や協力を得られず、やがて衰退していくことは自明の理である。企業が市民にとって必要な会社として認知されるには、地域に対する投資や雇用にとどまることなく、目線を下げた協調性を持って広く市民活動に積極的に参加することにある。企業独自のノウハウを活かし身の丈に合った地域貢献活動は、規模の大小に関わらずすべての企業にできるはずである。そのことは、とりまおさず地域への利益還元のみならず、企業が生き残るための重要な営業戦略のひとつでもある。

11. みちのくの四季、田園ランドスケープスケッチ 嶋倉正明（嶋倉風景研究室）

みちのく（東北地方）には日本のふるさとの風景と言える田園の原風景が多数残っている。それらは日常ある普通の風景と思われがちだが、その価値を表現し伝えていくことはランドスケープに関わる技術者として重要な使命と考えている。一般的には、写真によることが多いがここでは、現地での写真撮影を行った後に正確な遠近法による描画を行う。その画像内にある多くの景観要素を整理し、取り去るべき障害要素はなにか、大切にすべきものはなにかをわかりやすく表現する技術を発表する。

口頭発表

1. デジタルスチルカメラを用いた簡便的測量手法の開発および文化財への応用

國井洋一（東京農業大学地域環境科学部）

近年、歴史的建造物に対するデジタル・アーカイブ化が行われているが、全国で重要文化財に指定されている建造物は3,000棟以上にもおよぶため、建造物の効率的3次元測量が期待されている。最近では高精度かつ効率的に3次元測量を行うための機器として、ノンプリズム型トータルステーションやレーザースキャナの開発が進んでいるが、一方では機器の価格面やデータ取得の簡便さ等の観点から、民生用デジタルスチルカメラによる写真測量技術が注目されている。しかしながら、一般的な写真測量では3次元座標が既知である地上基準点を計測対象内に複数配置する必要があるため、対象物に接触することが困難な文化財においては3次元測量に対するボトルネックとなる。そこで、本研究ではデジタルスチルカメラによる撮影画像枚数を増加させることで、地上基準点を必要せず3次元測量を行う手法を開発し、開発した手法の性能評価および文化財計測への応用性について検討を行った。

2. 海の森公園の土づくりに貢献する「剪定枝葉堆肥化事業」の取組み

菊池謙二・荻野淳司・斎藤 悟・大場淳一
風間啓秀・佐藤忠継・杉山直樹・松尾長才
卯之原昇・奥山 寛・林 輝幸・山下得男
岡野正和・佐藤正和・佐藤雅彦・鈴木義人
松田武彦・小宮山載彦

（東京都造園緑化業協会 海の森特別委員会）

海の森公園は、今後30年の時間をかけてつくる都民の森づくり事業である。これは都市緑化事業の一環であるとともに、第二の明治神宮の森づくりともいうべき、後世に誇る平成の造園技術をかけた重要な事業といえる。海の森の植栽基盤整備に必要な堆肥は、リサイクルの視点から、剪定枝葉を対象とした「緑のリサイクル」により対応する方針が東京都から打ち出された。この方針に基づき、東京都内の公園や道路の樹木手入れから発生する剪定枝葉を対象範囲にした、剪定枝葉を原料とする堆肥事業が計画された。剪定枝葉堆肥化事業は海の森の土づくり

に必要な堆肥を供給するために、計画的に剪定枝葉を調達して堆肥を生産する東京都との協働事業である。

3. 木質系廃棄物由来の堆肥による土壤改良効果

飯泉浩二（千葉大学園芸学部）

高橋輝昌（千葉大学大学院園芸学研究科）

公園樹や街路樹などの管理で発生する木質系廃棄物の活用法の一つとして、木質系廃棄物由来の堆肥の農業利用が考えられる。本研究では木質系廃棄物由来の堆肥を土壤に施要することによる土壤改良効果を明らかにすることを目的とした。茨城県行方市の耕作地土壤に木質系廃棄物由来の堆肥を施用し、未施用の土壤と物理的・化学的・生物的性質を比較した。その結果、木質系廃棄物由来の堆肥は主に土壤の保水力、保肥力、有機物を分解する微生物の活性を高めていた。

4. 東京都内における街路樹の植栽管理実態

北島寿行・内田 均

（東京農業大学短期大学部環境緑地学科）

都市における貴重な緑である街路樹の植栽管理実態を把握するため、都内の役所へアンケート調査を行った。その結果、植栽目的は日陰の提供やヒートアイランド防止などの環境改善と答える役所が多い反面、住民の苦情や管理面で強剪定をせざるを得ない問題が浮き彫りになった。6割の役所が管理する業者を毎年替えているものの、同一業者による管理の方が樹形の維持や苦情対応が容易と考える役所が7割強もあった。夏場の剪定は、区部の多くは台風対策などのために実施しているが、市町部では緑陰確保のために実施しない所が多く見解が異なっていた。樹種選定では、緊縮財政の煽りで管理が容易な樹種へと移行していることがわかった。

5. ソメイヨシノにおける防菌処理の違いが損傷被覆組織形成に及ぼす影響

島村拓也（東京農業大学地域環境科学部造園科学科）

内田 均（東京農業大学短期大学部環境緑地学科）

堀 大才（NPO法人樹木生態研究会）

剪定の傷口から腐朽が進行し幹の空洞化にまで発展している樹木が多くあり、時には倒木も生じている。そこで全国の樹木医から剪定傷口への塗布剤使

用の有無とその種類、効果などを聞いた結果から供試塗布剤を選び比較試験を行った。供試木は傷が生じた時の防御反応の強さに個体毎の遺伝的差がなく、しかも傷口からの腐朽が生じやすいとされているソメイヨシノとした。その結果、腐朽しやすいとされるソメイヨシノでも正しい剪定は無塗布でも材変色を阻止したが、生きた組織を殺さない殺菌塗布剤はその結果をさらに高めた。しかし生きた組織を殺すほどの強い塗布剤はカルス形成を阻害し、材変色も促進する事が判明した。

6. 間伐が里山生態系の物質循環特性に及ぼす影響

高橋輝昌（千葉大学大学院園芸学研究科）

加藤秀明（千葉大学園芸学部）

小林達明（千葉大学大学院園芸学研究科）

東京都立野山北・六道山公園で行われている里山の伐採(間伐)管理が、里山生態系の物質循環特性にどのような影響を与えているのかを土壤微生物活性と土壤中の有機物濃度を指標として明らかにするとともに、現行の「20年」の管理周期の適切性について検討した。土壤中の有機物濃度と微生物活性は伐採によって減少するものの、伐採後概ね10年程度で伐採前と同様の値に回復した。このことから、現行の伐採周期である20年は伐採された生態系の回復に十分な期間であり、物質循環の規模を維持する立場からは妥当であると判断される。

7. 整備段階の境川遊水地におけるサギ類の利用環境に関する研究

清島千鶴江（日本大学大学院生物資源研究科）

吉田博宣・葉山嘉一（日本大学生物資源科学部）

治水対策の一例として実施される遊水地整備において、近年、環境保全の観点から多様な生物が生息する水辺環境の創出を目指したピオトープ型遊水地が取り入れられつつある。その一方で、河川流域において生息空間の減少が懸念されているコウノトリ目サギ類の存在がある。本研究では、ピオトープ計画が備わる境川遊水地を事例に、整備中、整備後のサギ類の利用実態を把握し、サギ類の新たな生息空間としても機能する可能性のある遊水地の整備に関する考察を行った。その結果、遊水地内においては水辺における多孔質の護岸や地底構造、杭の重要性が示唆された。また、境川沿いにおけるサギ類の利

用環境割合から遊水地が生息利用空間として重要であることが示唆された。

8. カンナのカドミウム吸収能の経時的变化について

浅井俊光・水庭千鶴子・近藤三雄

(東京農業大学地域環境科学部造園科学科)

供試植物に強健で植物体も大きく、中国では湖畔や河川での水質浄化に目覚ましい成果を上げており、水田環境への適性も高いと考えられるカンナを選出し、実験期間の長短によるCd吸収量及び生育被害への影響の究明することを目的とした。実験の結果、カンナは実験期間に関係なく茎葉部にCdを蓄積せず、吸収したCdのほぼ全てが根部に蓄積し、なおかつ、その値は実験期間が長くなるに従って最大で5905.2mg/kgと、著しく高くなることが明らかとなった。さらに、本実験の設定範囲内では全く生育被害を受けず、極めて高いCd耐性を有した有望なファイトレメディエーション用植物であるといえる。

9. 歯科医の診療室の緑化が患者に与える心理・生理的効果について

阿藤 舞 (岡山大学歯学部)

水庭千鶴子・近藤三雄 (東京農業大学)

実際の歯科診療室内において、植物の有無によって緊張の度合いが変化するかを、RPP (Rate Pressure Product) 値を用いて測定した結果、個人差が多少あるものの植物がある場合において、緊張の度合いは減少し、逆に植物がなくなることによって緊張の度合いが高まることが明らかとなった。実験では、実験の順序を入れ替えることにより、実験の場所や測定に対する「慣れ」についても調べ、実際に繰り返し実験を行うことにより、被験者は「慣れ」を生じ、緊張の度合いが低くなるが、植物があることによる緊張の度合いの緩和効果は「慣れ」よりも高いことが明らかとなった。

10. 屋上緑化(芝棟、芝屋根、屋上庭園)の起源と変遷に関する研究

近藤三雄・岡田鏡子

(東京農業大学地域環境科学部造園科学科)

本報では、芝棟、芝屋根、屋上庭園など広義の屋上緑化の起源と変遷について明らかにする研究の一

端を報告した。芝棟に関しては、近年、各地で復元されている約5000年前の竪穴住居につくられている芝棟は事実と異なることを指摘した。屋上庭園に関しては、これまで明治(1907)年竣工の三越呉服店等の鉄筋コンクリート建築の屋上につくられてきたものが最古であるというのが有力な説であったが、それより以前の明治中期の横浜や銀座の煉瓦建築あるいは人造石でつくった建物の屋上に立派な屋上庭園がつくられていた事実を明らかにした。

11. 国内外における屋上緑化施策・事業の体系化と評価に関する研究

齋藤雅子・近藤三雄

(東京農業大学地域環境科学部造園科学科)

わが国での屋上緑化への取り組みは、ヒートアイランド現象緩和を主たる目的とし展開され、各自治体では屋上緑化推進を図るため様々な関連施策を打ち出している。しかしながらその進捗状況は当初の計画を大きく下回り、施工後の管理状態の問題も指摘されている。各国においては、国情、気候風土の違いによって屋上緑化の目的およびその展開方法は異なる。欧米においては、地球規模での水循環を視野に入れた透水面確保の一環として屋上緑化を位置づけ、洪水抑制を目的とした助成金、優遇措置を設け、屋上緑化推進を図っている。本研究は、国内外の情報を施策・事業を中心に体系的に整理し、わが国でのより良い屋上緑化事業の推進のために参考となりうる方策を探り、その導入方法を検討する。

12. 「ランドスケープ現代史」研究の射程、および高度経済成長期におけるランドスケープ業界の諸相

栗野 隆 (国立文化財機構・奈良文化財研究所)

「ランドスケープ現代史」研究の射程は、戦後20世紀の課題をうきほりにしたうえで20世紀のランドスケープを展望するというものである。今回はまず、高度経済成長期におけるランドスケープ業界の概要をとらえることを目的とした。本研究の結果、この時代は、都市公園法制定に向けた公国施設基準研究会の活動、遊び場研究会や児童施設研究会による遊び場の研究展開、環境計画グループや造園家集団による設計活動など、所属組織にとらわれない横断的な自主的研究グループの活動が活発におこなわれ、また、ランドスケープコンサルタンツ協会の前身に

あたる造園設計事務所連合が誕生するなど、ランドスケープの専門職能・職域形成を考えるうえできわめて重要な時代であるということがわかった。

13. 1950～60年代における子どもの遊び場に関する造園家の活動

小林邦隆（株式会社タム地域環境研究所）
高島智晴（財団法人東京都公園協会）

1950～60年代の都市部では、子どもの遊び場が社会問題となり、それに対応すべく若手造園家を中心に遊び場の活動が行われた。昭和32年に発足した「遊び場研究会」では、造園関連の官公庁、大学、企業などが幅広く集まり、造園界を広く巻き込んだ活動の一つであった。会では斬新な遊具や公園デザインを研究し、それまでの児童公園の枠を越えたデザインを提案し、実現していった。また、「遊び場研究会」のメンバーが多く編集に参加した『こどものあそびばー計画・設計のすべてー』では、当時の遊び場に関する成果をとりまとめ、その後の遊具や児童公園に影響を与えていった。

14. 日本住宅公園の誕生と団地造園の展開

武田重昭（独立行政法人都市再生機構）
小林邦隆（株式会社タム地域環境研究所）

日本住宅公園の誕生から、団地タイプごとの団地造園の変遷を追うとともに、当時の屋外空間の整備に求められた課題を示した。造園設計分野の外部化のためのシステムの形成過程を明らかにし、これらを通じた団地造園の成果と課題を明らかにした。

15. イフラ日本大会と造園設計事務所連合の誕生

神藤正人（東京農業大学短期大学部環境緑地学科）
馬場菜生（インディペンデント・リサーチャー）
粟野 隆（国立文化財機構・奈良文化財研究所）
造園懇話会では、官・民の技術者を中心に試論がもたれたが、そこであげられた意見は「造園家の組織をどうするか」だった。そんななか、第9回イフラ世界大会の日本開催が決定、昭和39年の開催にむけて日本側は佐藤昌を代表とする事務局を開設した。懇話会の民間技術者有志はイフラ東京大会に結集し、「造園設計事務所連合」を結成した。連合誕生による設計業界形成は設計外注を定着させ、事業の合理化をはかったが、官公庁のインハウス技術者

が次々と民間事務所を設立していくことにもつながった。つまり連合設立によって顕在化した官公庁技術者の民間転向は、官公庁では実際にモノをつくることができないという“脱インハウス宣言”とも読み取れるのである。

16. 戦後日本の本格的ランドスケープアーキテクト池原謙一郎のまなざし

高島智晴（財団法人東京都公園協会）
馬場菜生（インディペンデント・リサーチャー）
神藤正人（東京農業大学短期大学部環境緑地学科）

戦後の造園界を読み解く上で池原謙一郎の活動に注目する。池原謙一郎（1928—2002）は造形美を得意とする設計家であった。子どもの新しい遊び場を開発した入谷町南公園と“石の山”。都市と自然の一体化を目指した代々木公園とペディストリアンデッキのデザイン。一方で次世代の造園デザインを考える“庭のデザイナー展”“16日会”などの活動を積極的に行うなど、戦後の造園界の中心的存在であった。これらの精力的な活動は、当時の役所における公園量産型による性能低下への抵抗であり、ホントウの公園とはなにか、ということを問うものであったと言える。

17. 日本における環境白書のアメニティ政策動向

古谷勝則（千葉大学大学院園芸学芸研究科）
齋藤伊久太郎（千葉大学地域観光創造センター）
加治 隆（特定非営利活動法人日本アメニティ研究所）
金 宣希（韓国国土研究院）

日本のアメニティ政策動向を、環境白書の記述をもとに4名の学識経験者で議論した。アメニティとは生活の質を示す言葉であり、生活様式の違いにより必要となる生活環境が異なる。環境白書には1979年度から2005年度までに142ヶ所の記述があった。日本の環境白書においてアメニティの用語が使われたのは、OECDの環境政策レビュー（1977）以降であり、心が感じる快適性を求めている。1993年の環境基本法制定によってアメニティの意味するところが拡張し、地域ごとの「循環」「共生」の考え方を反映した快適環境づくりに枠を広げた。2006年度の環境白書にはアメニティの記述はなくなったが、人間にとって快適な生活を追い求める原則は変わりないと考えている。

18. 都市防災における避難路としての街路形態の評価に関する研究

待野健太郎（日本大学大学院生物資源科学研究科）

吉田博宣（日本大学生物資源科学部）

都市防災において、東京をはじめとする人口や建築物が密集する都市部の災害に対する脆弱性が問題となっている。特に東京は、古くからの都市基盤や木造建築密集地が残存しており、密集地の細街路においては災害時に直接的な危険となるものや避難・救助等を困難にする要素が多く存在する。本研究ではこれまでの震災の事例報告などを参考に、独自の街路形態のチェックリストと危険度判定指標を作成し、それを用いて危険性がどの程度潜んでいるかを指数として数量化し、問題個所の判断に役立て、古くからの街並みを残す地域の危険性緩和のための改善案を提案した。

19. 千葉県の市川砂洲におけるクロマツ風景の変遷

中村啓介（新京成電鉄株式会社）

赤坂 信（千葉大学大学院園芸学研究科）

千葉縣市川市では、市川砂洲上にクロマツが集団的に生育しており、クロマツと住宅地が混在した独特な景観を見ることができている。しかし、とりまく環境や住民の意識の変化により、クロマツ風景の存続が危機に瀕している。クロマツの風景を守る意味に言及している既往の研究は少ない。そこで、この研究では、市川砂洲上のクロマツを、土地の成り立ちや、その土地に展開された農耕をはじめとする人の営みなどの歴史を伝える遺産として捉え、その意味の変遷を明らかにした。

20. 長野県駒ヶ根市を対象とした主婦層の日常行動における都市公園・社寺・農地の利用

村松保枝（千葉大学園芸学部）

赤坂 信（千葉大学大学院園芸学研究科）

住環境の質的向上や自然環境に対する国民意識の高まりのなか、住みよさの一指標として緑地利用の実態を明らかにすることは、人口減少に伴う衰退が課題視される地方小都市の地域活性化に繋がると考えた。本研究では、長野県駒ヶ根市の住環境における施設と緑地状況が異なる3地区を対象とし、主婦層の日常行動における緑地利用の実態を明らかにすることを目的とし、アンケートを行なった。結果と

して、地方小都市において「社寺」「農地」が徒歩圏に残される地区では散歩や趣味を目的とした利用がみられ、日常行動における緑地利用の位置付けは高いと考えられた。住みよさの一指標としての緑地利用には一定の価値が認められた。

21. 尾瀬国立公園における利用者のイメージのギャップによる装備状況の違いについて

阿部 薫（千葉大学園芸学部）

村松保枝（千葉大学園芸学部）

中島敏博（千葉大学園芸学部）

古谷勝則（千葉大学大学院園芸学研究科）

尾瀬国立公園の年間利用者数は減少傾向にあるが、傷病者数は増加の一途を辿っている。事故を防止するには、尾瀬を山であると認識する必要性が指摘されている。本研究では利用者の尾瀬来訪前のイメージによる、靴・雨具の準備状況の違いを調査した。アンケート調査結果により、来訪前の尾瀬に対するイメージが「平坦な散策路」と答えた回答者はスニーカーを履き、「登山道」と答えた回答者は登山靴を履く傾向にあった。このような装備状況の違いにより、尾瀬への来訪前のイメージと実際の尾瀬との間にギャップが生じていることがわかった。このギャップを解消し、適切な装備を促すためには、尾瀬は山であることを共通認識できるよう、有効な事前情報を提供していく必要がある。

22. 近代におけるスイス・アルプスの山岳観光の開発と利用の問題

赤坂 信（千葉大学大学院園芸学研究科）

1931年に国際観光委員会が「山の座談会」で専門家から本場ヨーロッパのアルプスの事情を聞き、また日本の山岳を中心とする国際観光が果たして可能かの判断材料を得ようとする動きがあった。スイスは山岳を利用して、外国の遊覧客によって国の経済を立てている国と目されていた。明治初期に欧米に派遣された岩倉使節団のスイス訪問の記述や当時の山岳絵画の動向、1873年に使節団も訪れたリギ山の観光開発の実態、高山植物の大量収奪の事実を瞥見した。アルプスの保護が非常に遅れて始まり、成功よりも多くの失敗をもたらしたことが、ヨーロッパにおいて一般的に知られていないことを考えれば、日本においてはヨーロッパのアルプスがすでに早く

から観光化が進み自然が荒廃していたことが、あまり知られることなく模範とみられていたといえよう。

23. 江ノ島地域における眺望景観に関する研究

川名 圭・阿部伸太

(東京農業大学地域環境科学部造園科学科)

本論文は、地域景観は、風土の中で育まれた生活様式や歴史性と密接な関係性を持った時代に応じて変化する要素と、眺望景観など地形や自然といった骨格的な不変性のある要素とによって構成されているとの仮説に立った研究の導入的考察である。過去の視覚的作品から景観を分析し、「地域らしい景観」の特性を明らかにした上で、今後の地域景観を考えていく上でどのような地域資源が重要なのかを考察した。結論として、①眺望景観は、複数の自治体に関する広域な地域が関係している。富士山や様々な山脈を含む眺望景観は江ノ島地域だけでなせるものではなく市外さらには県外の景を含めておりスケールは広い。②江ノ島の眺望景観は、遠景、中景、近景によって構成されている。江ノ島こそ遠景、中景、近景と様々な景へと変化するが、どの作品も遠景、中景、近景と3つの景によって構成されていることが明らかになった。③眺望景観では、遠景となっている景観構成要素とは比較的不変性をもち、中景、近景は時代ごとの特徴を反映している傾向が読み取れた。

24. 木更津に於ける花街空間の空間構造の変遷について

丸川祐一郎・荒井 歩

(東京農業大学地域環境科学部)

本研究は、木更津の花街の空間構造の変遷を明らかにし、今後の木更津の観光地の空間のあり方の検討の一素材となることを大きな目標とした。具体的な目的として、空間構造の変遷を明らかにするとともに、空間構造を支えていた仕組みの変遷をも明らかにすることにした。その結果、近世江戸との舟運の発達とともに、木更津に出入りをしてきた旅人達の「長時間の滞留」という行動が、明快な空間構造を形成していたこと。そして、時代が下るにつれ、空間構造を支えていた旅人達の長時間の滞留という仕組みが、交通機関の進展や産業の変容の影響を受

け崩壊していくことで、空間構造が弱体化していった傾向が明らかとなった。

25. 風景画における森林の描かれ方に関する研究—ゲシュタルト的景観論を超えて—

藤原 敦・小野良平・伊藤 弘

(東京大学大学院農学生命科学研究科)

景観とは主体と対象の間に生じる「まなざし」と呼ばれる関係といえる。近年日本では地域づくりに地域らしさの表出や個性的な地域景観の形成が重要視されており、山林の多い日本では森林の特徴から地域の営みや文化との関係を見出すまなざしの設定が求められている。本研究では風景画は時代のまなざしを反映するものであるとして、風景画における森林の描かれ方から森林に対するまなざしの変遷を西欧と日本で比較しながら辿った。西欧の風景画では線遠近法という技法の制約から森林は背景の平面としてゲシュタルト的「地」に分節されるが、日本の風景画では画全体としては「図・地」も関係性が希薄で森林については各構成要素の機微や相互関係を物語性のある「図」として全体に配置させる傾向がみられ、これは日本の地域の森林景観のまなざしに応用できる可能性がある。

26. 陶磁器産地における景観構造について

村手久仁子 (東京農業大学大学院農学研究科)

荒井 歩 (東京農業大学地域環境科学部)

陶磁器産地は、技術の保護と継承を行うことで、盛衰を繰り返して発展してきた。各々の陶磁器産地の風土と歴史が、陶郷と呼ばれ親しまれてきた陶磁器産地特有の景観をも形成したことは確かである。とりわけ、陶磁器製造に不可欠な原材料を包含する山や製造に必要な河川、傾斜地等の地形・水系条件が陶磁器産地における景観に影響を与えている。本研究では陶磁器産地の社会背景や産業形態からみた9つのパターン分類による歴史的特徴を明らかにし、陶磁器産地の景観構造タイプを分類した。また、朝鮮陶工の流入の経緯や陶工の狭小地域への隔離による事実から陶磁器製造の中心地が歴史的背景に伴って、産地周辺を移動または分散していることが推測された。

27. 国内ワイン産業における眺望景観の特徴について

荒井 歩 (東京農工大学地域環境科学部)

石森俊也 (丸藤シートパイル株式会社)

ワイン産業とは、ブドウ栽培と醸造からなる産業である。うち、ブドウ栽培では自然要因および人的要因によってブドウの品質が決定する。ワインにおける品質保証制度の基礎となるテロワール概念は、上記要因の統合であるとされている。本研究では、固有のテロワールに基づく農地と周辺環境の眺め、言い換えれば、ワイン産業の景観に着目した。ワイン産業固有の景観、特に視覚的に地形を確認できる眺望景観を活かした経営を行う国内ワイン生産会社の現状を把握し、運営内容と歴史に基づき3タイプに分類した。さらに、該当眺望景観の視点場となるワイナリーと主対象の関係を地形タイプごとに分析し、その視覚的構造の特徴を明らかにした。

28. 画家川合玉堂の絵画を通しての風景観と二松庵園庭

大山絵里・原田江里・柳谷亮治・吉田博宣

(日本大学生物資源科学部)

二松庵園庭は川合玉堂により考案された。川合玉堂は、明治から昭和にかけて活躍した日本画家であり、四条派の親しみ深い作風と狩野派の品格とを合わせ持ち、詩情に満ちた自然観察によって、日本的で穏健な風景画を描いた。二松庵は、平成7年11月1日に横浜市指定有形文化財となるが、園庭部分は当時の景観を残す重要な場であるにもかかわらず、歴史的・文化的価値はまだ明らかにされていない。そのため、この価値を明らかにすることが重要と考えられる。しかし、作庭完成当時の二松庵の資料は、東京大空襲の際に牛込本邸宅が焼失してしまい、残っているものはほとんどない。一方で、絵画作品には、玉堂の思想、好み、実際の風景など様々な意味がこめられているものと考えられる。そこで、園庭を考案した玉堂が、どのような考えのもとから庭を作らせたのか、絵画を通して作庭に影響を与えた玉堂の風景観を考察した。

29. 二松庵、牛込本邸及び偶庵の川合玉堂の庭園観について

原田江里・大山絵里・柳谷亮治・吉田博宣

(日本大学生物資源科学部)

本研究では、川合玉堂が一番初めに雑木への思いを実際に作りだした二松庵に焦点を当てつつ、その後作られた牛込本邸や偶庵と比較し共通点や相違点を出していく。これらを文献調査やヒアリング調査、現地調査を行い、結果的に庭造りに何を重視しどのような好みや思いがあったのか全てを総合的に検討し、川合玉堂の庭園観を考察することを目的とした。調査の結果、三庭園の共通点は自然(雑木)と眺望の良さとの流れであった。全ての場所には玉堂が幼い時から好んでいたという自然が根底にあり、三庭園は玉堂が師とし好んだ自然を実際に組み立てて表現した場であると言えるのではないだろうか。

30. 震災復興小公園、元町公園をめぐる一考

鹿野陽子 (東京大学大学院農学生命科学研究科)

関東大震災からの復興事業は日本の近代化を雄弁に語るものである。なかでも、東京市(当時)の復興小公園と復興小学校は高い評価を受けている。しかしこれらの殆どは、消失・改変を余儀なくされ、建設当時の空間構成と主要な建造物が、公園と小学校の双方で揃って状態よく残っているものは、文京区の元町公園(文京区本郷1-1、昭和5年開設)と旧元町小学校(昭和2年校舍竣工、平成10年統廃合のため廃校)のみである。平成18年4月にこの元町公園を廃止する旨の都市計画変更案が開示され、都市計画審議会が開催された。本稿は、都市計画変更案の開示から審議打ちりに至る経緯を報告し、審議会答申を踏まえて考察した今後の展望を述べるものである。

31. 天守からの距離を基準とした姫路城城址公園の形態に関する研究

秦 裕之 (東京大学大学院農学生命科学研究科)

歴史的環境に親しむことを目的として整備された8つの姫路城城址公園について、“天守からの距離”という基準を軸に、現状の形態の把握、整理を行い、今後の城北公園整備に向けて目指すべき整備指針を考察した。結果として、現在の城址公園は、“天守からの地図上の直線距離”が周辺施設や入口配置といった人々を呼び込む際に強く影響を与える要素と関係していることが確認できた。しかし、実際に城地公園を訪れる人々のことを考えるのであれば、整備のしやすさばかりに左右された形態ではなく、天

守からの地図上・アクセス上両面における近さや、人々を呼び込む要素について、より配慮した形態であるべきではないだろうか。

32. 釜山市における斜面緑地の現状と高層集合住宅の立地特性

金 永河（東京農業大学大学院農学研究科）
金子忠一・熊谷洋一（東京農業大学地域環境科学部）

本研究は、高層集合住宅が急速に進み斜面都市として知られる釜山市を対象として、斜面緑地の現状と高層集合住宅の立地特性を究明し、生活空間として斜面緑地がきわめて重要な要素であることを明らかにした。地形図、土地利用図、植生図、都市計画図、行政資料、現地調査によって斜面緑地の現状を把握し、行政地図、1/5000地番図、K B国民銀行が提供する集合住宅情報を基に高層集合住宅の立地特性を分析した。その結果、ほとんどの高層集合住宅は斜面緑地縁辺1 km圏内に位置しており、特に、中心市街地から離れた斜面緑地周辺には、大規模な高層集合住宅が多く分布していて、高層集合住宅は斜面緑地と密接な関係にあることが判った。

33. 六義園八十八境における水香江について

柴田見伸（株式会社日比谷花壇）
吉田博宣（日本大学生物資源科学部）

本研究は六義園八十八境のひとつである水香江の景石を調査対象に採り上げ、現況調査と改善の検討を目的とした。水香江は園内水景の最も高地に存在するが、現在の水源である井戸の設置位置の関係上、水は存在しない。調査は景石の現況把握のため、1/100スケール平面図の作製、景石のスケッチ、景石周囲の堆積土壌の測定、文献調査を行った。水香江は緩やかなS字を描いており、滝石組を除いて一定間隔を置いて景石が配置してある。水香江の上流部より、上流滝石組、広流域部景石、飛び石付近部景石、狭流域部景石、下流滝石組と分類し考察をおこなった。現在の水香江では特に飛び石付近部景石、下流滝石組の景観が与える影響は大きく、早急な修復が必要であると考えられる。

34. 旧川合玉堂別邸「二松庵」の植生の変遷と今後の管理

柳谷亮治・大山絵理・原田江理・吉田博宣

（日本大学生物資源科学部）

本研究は二松庵の庭園部を対象として、作庭当時から現在に至るまでの植生、及び、別邸からの庭園の遠景の眺望の変遷を明らかにすることにより、作庭者の意匠に沿った今後の植生管理に反映することを目的とする。現在における二松庵庭園部の植生、ヒアリング調査、当時から現在に至る二松庵および周辺の植生と地形の変遷を地形図により把握した結果、管理形態の変化、及び、周辺の景観の変遷を受け、植生に関して当時とは多くの差違が認められ、当時の意匠とは異なると推察される。一方で、景観による評価を試みることで、立体的に当時の庭園風景との差違を見出した。作庭者の意匠に沿った管理を目指す上で、植生の変遷のみならず、景観を視野に入れた検討が有効ではないかと思われる。

35. 旧長岡市の北西地域における屋敷林の現況について

室橋拓弥（星野造園）

荒井 歩（東京農業大学地域環境科学部）

新潟県長岡市では、「長岡市都市景観基本計画」の中で緑豊かな田園・集落景観を構成している要素として屋敷林を挙げているが、基礎的データが不明確である。本研究は、旧長岡市の屋敷林と周辺環境要素の位置関係を分析し、既往文献等において漠然と挙げられている長岡市における屋敷林の特徴に対して、具体的な説明をあたえることを目的とする。研究の結果、旧長岡市の北西地域における屋敷林は、主に西側の一方や北西側の二方に配置しているタイプが多い。これらは西山や河川からの北風または南風対策としての役割があるからだと考えられる。また、屋敷林を構成する樹木はスギを中心に、ケヤキと混植しているものが多いことが明らかとなった。

ポスター発表

1. 生物多様性保全のための屋上緑化空間の創出とモニタリング調査

森 飛翔（武蔵工業大学大学院環境情報学研究所）
吉崎真司（武蔵工業大学環境情報学部）

主にヒートアイランド現象緩和技術としての屋上緑化は、当初、その多くが芝生やセダム類で平面的

に様な緑化を行うものであった。近年、薄層・軽量でも多様な樹種の植栽が可能になってきており、屋上緑化はヒートアイランド現象緩和以外の効果も期待されている。生物多様性保全の効果もその一つで、屋上緑化が生物の移動の中継点や生息空間として機能すると期待されているが、どの程度効果があるのかは十分に明らかになっていないと言えないと思われる。本研究では、対象地周辺に生息する生物が利用するような屋上緑化を創出し、モニタリング調査から緑化空間が生物多様性保全の効果にどの程度寄与するのかを明らかにすることを目的とした。

2. 霧ヶ峰における二次草原再生実験とその効果に関する一考察

熊田章子（株式会社地域環境計画）

栗原雅博・長内健一（霧ヶ峰ネットワーク）

本研究では、二次草原の効果的な草原維持活動を行うための検討材料を得るために、伝統的手法の一つである草刈りが二次草原の植生へどのような影響を及ぼすのかを明らかにすることを目的とした。実験区は南側斜面のススキが優占する群落である。草刈り処理は2005年10月に行った。実施後の2006年調査、2007年調査ではススキの高さおよび被度が実施前および対象区に比べ低く、実施前の調査では確認されなかったコオニユリなどが確認され、種数が増加した。二次草原の草原維持を目的とした管理手法において、種の多様性の観点から草刈りは効果的であると考えられた。

3. コケを用いた屋上・壁面緑化のための実験的研究

下田実千（日本大学大学院生物資源科学研究科）

勝野武彦（日本大学生物資源科学部）

近年、コケを用いた緑化に注目が集められている。国土交通省による調査報告によれば、コケ類を主体とした屋上緑化面積は2000年では皆無であったが、近年、その応用が考えられ、実用化が模索されている。本実験ではスナゴケとハイゴケのコケ板を用い、より実用化した緑化に近づけるため屋上に角度を6段階、東西南北に向けて設置し、コケの生育調査と環境調査を行った。実験から、日射量が多くコケ板内温度が高くても傾斜が緩ければスナゴケは生育できるとことが分かった。またハイゴケでは、

90°の北向きのコケ板が緑被率を高く保った。スナゴケ・ハイゴケ共に北・西向きよりも東・南向きの生育が不良だった。

4. 剪定枝葉発酵堆肥の芝生目土としての利用について

藤崎健一郎・岸郁奈江（日本大学生物資源科学部）

荻野淳司・石井匡志（アゴラ造園株式会社）

樹木の剪定枝葉を発酵させて作り出された堆肥は、これまで畑地や園芸用に供給され効果をあげてきた。この堆肥を芝生の目土として利用する可能性を検討するための試験施工を行った。対象地は鎌倉市にある深沢多目的広場で、埴壤土質の既存土に高麗芝（和名：コウシュンシバ）が植栽されている。芝生面をおよそ6m間隔の縞状に区切り、堆肥区、畑土区、対照区（無目土）を交互に設定した。芝草の草高や葉色について堆肥区と畑土区の間にはほとんど差が見られなかった。省資源および廃棄物減量の観点から、公園内などから発生する剪定枝葉を目土として利用することは有効であると考えられる。

5. 都市における地域性緑化のための緑化樹種データベースの構築に関する提案

平田道隆（武蔵工業大学大学院環境情報学研究科）

近年、世界的に生物多様性保全が提唱されてきており、我が国においても取り組むべき課題の一つとして認識されてきている。緑化は生物多様性保全に寄与すると考えられるが、特に都市緑化においては緑化の中身、つまり緑の質的な面まで十分に考慮されているとは言えない状況である。自治体における緑化方針等においては、在来種や郷土種といったキーワードが見られるようになってきているが、普及はまだ十分ではないと考えられる。そこで本研究では、都市部の建築外構における緑環境の実態把握を行い、地域性緑化のための緑化樹木データベースの構築に関する提案を試みた。

6. 野口健環境学校と実施後の参加者の環境活動について

渋谷郁里・栗田和弥（東京農業大学地域環境科学部）

登山家・野口健が主宰する活動である「野口健環境学校」は、コスモ石油のCSR活動であるコスモエコカード基金の援助を受け実施しているもので、

NPOや自治体、その他の企業等と連携を図り、地域性を活かして全国各地で実施され、2003年度から2007年度の9月までの4年間で約313名が参加した。環境学校では「環境メッセンジャー」の育成を目標とし、環境学校に参加していない多くの人にも活動を起すために「伝える」ことに重点を置き、インターネット等を使った情報発信を行っている。また、実際に参加後に個別の行動することも促して、どのような活動をしたかの報告があり、実施後の参加者の環境活動の広がりや今後の課題について報告する。

7. 都立上野恩賜公園の知名度に関する調査分析

東京農業大学造園科学科景観政策学研究室・ガーデンデザイン研究室・臼井路子・進士五十八・鈴木誠・青木いづみ・服部 勉

(東京農業大学造園科学科)

上野公園は江戸期までは寛永寺の境内として親しまれてきたが1873年に我が国初の公園の一つに指定され、以降江戸・東京の名所性を伝えている。明治以降、園内には近代化を象徴する博物館や美術館が次々と建設され、07年には上野公園周辺地区を文化・観光の拠点として再生するため、上野公園ランドデザインが計画された。その背景には上野駅や園内の施設相互の関係性、公園機能の問題などが生じているためである。以上を踏まえ、本調査では寛永寺など歴史的建造物14施設、東京国立博物館など文化教養施設20施設の知名度・利用頻度を公園来訪者324人に対面式アンケート調査を行い、今後の公園の顔となる魅力を探った。

8. 県立公園群馬の森における県民参加による公園利用・整備の事例報告

小林邦隆・秋山 寛 (株式会社タム地域環境研究所)

県立公園群馬の森において、平成16年度から県民参加による公園の利用・整備計画を実施した。はじめの2年間はワークショップにより、公園の現状把握、利用・整備の内容、管理体制等について検討し、それらを取りまとめた「休日にわんぱくの丘へ行こう！」を作成した。平成18年度からは、わんぱくの丘を利用したイベント企画や植栽管理を行う県民主体の団体「群馬の森サポーターズクラブ準備会」が発足し、次年度にはより組織化した「ぐんまの森たのしみたいー群馬の森サポーターズクラブ」へ発

展した。平成17年度から導入された指定管理者制度により、県民、県、指定管理者という3者体制を円滑に運営することが、これからの県営公園の市民参加には求められる。

9. 中越震災みどり復興ワークキャンプの活動 '07 初夏

大橋加菜・秋山 寛 (株式会社タム地域環境研究所)

中越震災緑復興ワーキングキャンプ実行委員会
本実行委員会では、2005年から継続して中越震災地に赴き、(社)長岡市公園緑地協会 鈴木重孝理事長、長岡造形大学環境デザイン学科 上野裕治教授らを中心とした地元ランドスケープアーキテクトとの協働により活動を進めている。本報告では、復旧から復興のステージを迎えている中越地方において2007年6月23日(土)、24日(日)に開催した「'07初夏 中越震災みどり復興ワークキャンプin山古志」の報告を行う。復興におけるリーディングプロジェクト「油夫フィールドミュージアム構想」の第一歩である崩落斜面での森づくり活動(ブナの種採り・苗床づくりなど)や、油夫地域(旧 山古志村役場周辺)での具体的活動の検討、震災から2年半の時間が経過した山古志の現地見学など当日の報告と共に今後の展開を提案する。

10. 北海道・道東地域におけるランドスケープの連続性に関する調査

芳賀実里・富田早苗・望月瑛仁・池延圭介・

阿部伸太 (東京農業大学地域環境科学部)

近年、旭川や知床は北海道観光の重要な拠点として注目されるようになってきている。しかし一方では北海道経済の低迷は已然として脱し切れていない。我が国のこうした拠点主義的な観光スタイルに対し、魅力的なランドスケープの連続性に注目することが重要であると考えられる。本調査で対象とした道東地域には、地形を尊重した第一次産業の土地利用が展開している。これは我が国における地域性豊かな美しい人文景観として捉えることができる。調査では、まず、観光パンフレットやガイドブックで紹介される地域と、現地周査の結果得られた景観資源の実態との差異を明らかにした。次に景観資源の分布特性を考察し、拠点間におけるランドスケープ形成の知見を整理した。

口頭発表

1. ホタルから考える環境—施工事例と地域交流—
小野天下・岩元一男・景井 厚・中村若菜（豊造園）

名古屋市東部は、かつて田畑と薪炭林の広がる豊かな里山の風景が見られたが、高度成長期とともに新興住宅街へと変貌を遂げた。里山が失われたこの現実を捉え、かねてから我々は里山と生き物の関係を多くの人々に知らせ、伝えていきたいと考えてきた。そこで、会社のモデルガーデンを実験場として利用し、狭小地ながら里山を再現し、ホタルの放流をはじめ、多くの生き物が生息する空間の創出に取り組んできてきた。その取り組みの経緯と賛同企業による施工事例について紹介する。

2. 長野県中南部のため池における水生植物の組成と環境条件との関係

福島敬彦（信州大学大学院農学研究科）

大窪久美子（信州大学農学部）

水生植物は絶滅危惧種を多く含む植物群であり、ため池はその生育地として重要と考えられる。長野県でのため池に生育する水生植物や環境条件に関する知見は乏しく、保全策の検討には基礎的データの収集が必要である。そこで本研究では長野県中南部のため池(止水域)に生育する水生植物の分布と環境条件との関係を明らかにすることを目的とした。調査はため池66ヶ所で行われた。2006年7月～11月に植物分布と水質調査を行い、2006年12月～2007年3月に管理者に対する管理状況・利水状況の聞き取り(件数21)を行った。絶滅危惧種の分布を確認し、水源の違いにより出現種の異なることが指摘された。

3. 愛・地球博記念公園もりのゾーン「林床花園」における樹林地整備—自生ツツジ類の育成手法についての調査事例報告—

小林高浩・戸澤哲也（飯沼コンサルタント）

愛・地球博記念公園もりのゾーン「林床花園」では、愛知県名古屋東部丘陵工事事務所からの委託を受け平成13年度に土壌・植物調査を実施し、翌年から3ヵ年をかけて設計と施工指導を組んだ樹林地整備を実施し博覧会開催時には良好な樹林地景観の提供が可能となった。平成18年度は公園内樹林地の象徴として自生ツツジ類の育成手法検討に取り組み、①樹林

整備による育成、②自生個体の移植による育成、③播種による増殖、の3手法の試験施工とモニタリング調査を行った。その結果、樹林地整備によって個体の増加傾向が認められた。また自生個体の移植一年後の生存率は約60%に留まること、現場播種による発芽率は極めて低いことが明らかになった。

4. オオキンケイギクの駆除に関する研究—分布形態・種子生産量・刈り込み試験からの考察—

藤原宣夫（岐阜県立国際園芸アカデミー）

北アメリカ原産の外来植物であるオオキンケイギクは旺盛な繁殖力を有し、急速にその分布を広げているため、2006年2月、外来生物法に基づく特定外来生物に指定された。これにより、その栽培、保管、運搬は禁止され、駆除についても努力が求められることとなった。オオキンケイギクはワイルドフラワー緑化で多用されたため、道路のり面に大きな分布をみることが多いが、都市公園においても使用され、花の名所とされていた場所もある。本研究では、法指定に対応し、その駆除を行い、在来植物による景観を回復するため、オオキンケイギクの繁殖生態について調査し、効率的な駆除手法について考察した。

5. 山古志地域の景観特性に関する研究—景観構成要素の相互関係とその歴史—

上野裕治・畔上太一（長岡造形大学造形学部）

本研究第1報では、山古志地域の景観特性が棚田、棚池、スギ林の織りなす風景であることを示した。本報告では、都市景観に比べて議論されることが少ない農業景観の位置づけを明確にするとともに、上記3要素のほか本地域の農業景観構成要素全体を把握することに努めた。さらにこれらの景観構成要素の類型化と、結果的に本地域の景観形成にあたって主要要素となった錦鯉、牛、養蚕の歴史的経緯を把握した。これにより本地域の優れた中山間地農業景観を復旧・保全するために必要な条件を考察した。

6. 農村住民による景観保全地域と景観構成要素の把握

毛利文陽（信州大学農学部緑地環境文化学コース）

佐々木邦宏（信州大学農学部森林科学科）

農村景観は、自然と人工物が調和した景観であり馴染み易く評価の高い景観であると考えられる。

一方で農村景観は住民の生産活動や生活形態、景観を形成する行動により変化し続けている。さらに、住民により景観保全に対する取り組みが行われている地域では、より住民の景観を形成する行動が顕著であると考えられる。そこで本研究では、住民の自主的な景観保全活動が行われている伊那市西箕輪地区を対象に、地域の景観の地理的把握を行うために現地踏査及び写真解析を行い景観構成要素およびその分布を明らかにした。

7. 山麓集落の神社における住民利用の変遷と空間変化—箕輪町下古田白山神社を事例として—

伊藤精悟・清水裕子（森林風致計画研究所）

農村集落における神社は、集落住民の共同関係の要とともに共同空間として利用されてきた。農業の比重低下は共同関係を希薄とし、神社の利用も低下した。神社空間の利用の実態を明らかにすることで、神社の存続の可能性の考察を、本研究の目的とする。長野県上伊那郡箕輪町下古田白山神社を取り上げ、戦前から近年までを3時代に区分し、神社境内の利用の種類、位置を、全戸調査し、神社境内の心域、後域、前域の区分で利用変化を分析した。心域の社殿の利用は、神社本来の祭礼などが持続しているが、近隣社会の伝統行事へと転換し、全域にわたった子供の遊びは衰退し、集会所などが近隣社会の集会や社会教育に利用され、利用の転換が見られた。

8. 山麓集落の神社における社叢の施業計画—箕輪町下古田白山神社を事例として—

清水裕子・伊藤精悟（森林風致計画研究所）

農村集落における神社の社叢は、地域の共同空間としても利用されている。しかし、このような社叢空間の維持管理に際し、多くの場合利用は考慮されず、単純に森林単体としての管理計画や施業が施されているのが現状である。著者らは、長野県上伊那郡箕輪町に位置する下古田白山神社の社叢を対象として、毎木調査、森林調査を行い、その結果と、別報(1)で調査を行った住民利用の現状と変遷を鑑みながら社叢の維持管理計画を試みた。(1)伊藤精悟・清水裕子：山麓集落の神社における住民利用の変遷と空間変化—箕輪町下古田白山神社を事例として—

9. 『石川縣山林會報』にみる「愛林運動」について

市川秀和（福井工業大学工学部）

戦後日本の国土復興と国土緑化推進を目的に始まった「国土緑化運動」とは、現在「全国植樹祭」に象徴される一大国民行事として広く知られているが、これはそもそも、戦前の昭和9年（1934）から大日本山林会が中心となって、全国一斉に挙行開始した「愛林日」という国民運動が、その原点となっている。これは植樹行事による林業活性化だけを狙ったものではなく、青少年に向けた愛林・愛山を通じた「自然保護」や「郷土愛護」などの精神育成も含まれており、さらに戦時体制下に到っては「挙国造林運動」へと変容していく、思想・実践において多面的な運動体であった。本発表では、昭和10年代の造園界や時代相の動向に眼を配りつつ、石川県下の「愛林運動」をケーススタディとして考察する。

10. 森林教育の違いにおける森林観の差—長野県林業大学校と信州大学農学部森林科学科（田園コース）を比較して—

清水裕子（森林風致計画研究所）

小山泰弘（長野県森林総合センター）

藤井晴行（東京工業大学）

拡大した人工造林地における森林の育成は、現在、重要な課題となっている。この、森林育成の担い手となる技術者の育成が急務であるといえる。この際、技術と共に、技術に付随する広い森林観の形成も重要であると考えられる。本研究では、このような技術者を育成する森林の専門教育に注目し、現場技術を展開する専門教育を目指す長野県林業大学校の学生と、森林を包含した広い環境の知識の習得と問題意識の涵養を目指す信州大学農学部森林科学科の学生を比較し、その教育効果としての森林観の違いを考察した。

11. 社会・環境緑地評価システム：SEGES（シージェス）

上野芳裕（都市緑化基金調査部調査課）

「社会・環境緑地評価システム：SEGESとは、民間事業者が所有する緑地及びそこでの活動について、ヒートアイランドの緩和、良好な景観形成、生物多様性の確保等、環境や社会への貢献度を第三者評価するもので、都市緑化の自主的な取り組みを推進

するために検討された。評価の視点として、明確な目標・計画・体制によって緑地が管理されているか、永続的な緑地の安定性が確保されているか、地域住民が参加する環境教育プログラムなどで緑地を活用しているかなど立地する周辺地域の社会性・環境性に考慮した緑地の管理と活用が重要となる。また、運用準備中の開発・建築事業における優良な緑化計画を評価・認定する都市開発版SEGESの概要について述べる。

12. 主成分分析による春季・夏季の里地・里山林における環境保全プログラムの特性とそのリラクゼーション効果の関係性に関する基礎的研究

上原三知（信州大学農学部森林科学科
緑地環境文化化学講座）

大阪府の「水と緑の健康都市事業地」の里地・里山林において一般市民と行政により企画・実施された環境保全活動の特性とそのリラクゼーション効果との関係性について、148名が回答した活動前後の気分テスト結果を用いた主成分分析を行ない以下のことが明らかになった。1) 本里山活動による参加者のストレス軽減量「TMD減少量」と活気増加を示す「V増化量」はともに体験前のストレス得点が大きく、かつ活気得点が低い人ほど改善が見られる傾向にあり、小規模のプログラムほどその効果が高くなる。2) ストレス軽減量「TMD減少量」は子供と家族で参加する場合や、林内・林縁部での活動によって改善される傾向にある。3) 活気の高まり「V増化量」は、男性の被験者で、メニュー数が多い活動ほど高まる傾向にある。

13. 第44回世界造園家会議世界大会inマレーシアに参加して

岡村 穰（名古屋市立大学芸術工学部）

2008年8月27日（月）から4日間、マレーシアの首都クアラルンプールで、Eden-ing the Earth（地球を楽園に）をテーマに第44回世界造園家会議(IFLA)世界大会が開催され、論文発表した。大臣の出席で開会が宣言され、以下の五つのサブテーマで基調講演及び研究発表が行われた。1. 自然資源としてのランドスケープと公園、2. 生物多様性とランドスケープ計画、3. 景観計画・デザインにおける持続可能性、4. 災害管理と造園、5. グローバリゼーション時代の

文化的景観。今年は建国50周年で、盛大な祝賀行事が行われ、市長の歓迎夕食会や独立記念パレードにも招待された。来年はオランダ。テーマは変貌する水。

14. 史跡名勝天然記念物保存法制定初期に選定された峡谷の名勝に関する基礎的研究

田中 聡（信州大学大学院農学研究科）

佐々木邦博（信州大学農学部森林科学科）

史蹟名勝天然記念物の峡谷・溪流に該当する名勝地の中で、指定年代が大正期、昭和初期の場所に関して、当時の景観の明確化と、現状との比較を行う。調査地は長野県飯田市「天龍峡」、長野県上松町「寢覚の床」、山梨県甲府市「御岳昇仙峡」の三ヶ所で、各種文献、データによる文献調査と指定説明文中の景観的特徴の確認とその他景観的特徴の抽出、測量調査による景観的特徴の明確化などの現地調査を行った。結果、飯田市天龍峡では、ダムによる水位上昇、植物の管理不足などから、当時の評価された特徴である急流・断崖・赤松の景観が薄らいでいることがわかった。他の二ヶ所では現在調査中である。

15. 中山道木曾路の宿場町の景観要素の特徴とその変遷

北原礼文（信州大学大学院農学研究科）

佐々木邦博（信州大学農学部森林科学科）

中山道木曾路は、江戸当時の面影が色濃く残り、重要伝統的建造物群保存地区（以下重伝地区）に、奈良井宿と妻籠宿が指定されているほどである。今までの宿場町の研究では、文化財保護法で指定されている重伝地区ですら、建築物以外の部分を調査した研究は少ない。そこで今回の研究では、建築物以外の景観要素に着目し、中山道木曾路の景観要素の特徴とその変遷を明らかにすることを目的とした。奈良井宿（重伝地区）と贅川宿・藪原宿（それ以外の宿場町）を対象とし、絵図・文献・現地調査によって、まず奈良井宿と贅川宿を調べた結果、奈良井宿では既存状態がよく、贅川宿では変遷が大きい傾向にあることが明らかとなった。

16. 江戸城の庭園

飛田範夫（長岡造形大学造形学部建築・環境デザイン学科）

徳川家康が天正18年（1590）に江戸城を居城としたことから、城内の庭園も御殿とともに整えられていった。文献上からは本丸・西の丸・二の丸・吹上に、庭園が存在していたことが確認できる。本格的なものは吹上の庭園と二の丸につくられた園池で、本丸には小規模な園池、西の丸には小規模な園池と山里の露地があった。本丸は将軍、西の丸は引退した将軍の居所だったことから、大規模な表御殿・奥御殿が造営されたために、面積的に余裕がなく、御殿に付随する小規模な庭園となった。明暦3年（1657）の大火後に大名屋敷を城外に撤去させて、避難場所として造営されたのが、いくつもの園池や流れを持つ吹上の庭園であった。

17. 名古屋市の公共空間におけるインドア・ランドスケープの事例

岡村 穰・宮田あゆみ（名古屋市立大学芸術工学部）

インドア・ランドスケープは、韓国のJeong Ji-Seong氏が2006年発行の著書のタイトルに用いた用語で、特にホテルや小売店の室内庭園やリビングテラスに樹木や水や自然石を用いることによって屋内空間に自然物を取り入れた事例を表す新用語である。本発表では、近年急速に整備されてきた名古屋駅周辺の高層ビルにおけるインドア・ランドスケープに該当する物件について、特に廊下や通路などの公共的空間について事例を紹介し、周辺の旧来のビル及び東京ミッドタウンや六本木ヒルズの事例と比較検討した結果を報告する。

18. 街路樹の剪定方式について

吉田勇次・桜井種夫・北原卓哉
（愛知県西三河建設事務所）

都市緑化の重要な構成要素である街路樹の剪定手法が、予算の減少、沿道住民の苦情等により近年極めて樹形が悪いものになっており、このままではその存在さえ危うくなっている。当面の対応として、安く、大きく樹形を整え、花を咲かせるなど本来の樹木の姿を求め剪定の試行を行った。基本的な方針としては建築限界、高圧電圧裸線及び民地境界に障るような空間の枝は枝元から切り落とし、単幹仕立

てとし、その余の枝は切らないこととして、施工造園業者と共に、勉強会等を開き、見本を造り岡崎・西尾地区において実施した。実施の結果、根元がすっきりとし、予算の減少、沿道住民の苦情等によりショーウィンドーや店先、看板がよく見えるようになったり、ヒトツバタゴの花がつくなど概ね良好な結果が得られた。今後とも継続して研究を重ね、より良き街路樹のすがたを求めていく。

19. 街路樹の今後

天野勝美・神谷重雄・後藤和之・
金原清二・岩附浩一（緑地研究会）

街路樹の今後の形態を考えながら低コストでの維持管理の確立を目指すことを目的として愛知県西三河土木事務所の協力で管内の街路樹（ナンキンハゼ・トウカエデ・ケヤキ・イチヨウ等）の剪定を将来樹高10mの完成品にするべく取り組みに入った。現時点での樹高は、まちまちで5～10mと幅広いものであった。樹高10mを意識することで従来の切り詰め剪定をやめ建築限界の確保及び樹高とのバランス(1/2剪定)を考慮しそれぞれの樹種にあった自然樹形を重視した剪定をおこなった。結果、下枝の高さが統一されたことで明るくなり並木が際立ち、目標樹高を高くすることにより葉量を確保することができるようになり、今年度の街路樹の胴ぶき・やご等は、減少したように思われる。樹高が、高くなることで弊害が出ることも考えられるが、美しく親しみと潤いのある街路樹の創造を目指し広く市民の皆さんに喜んで頂けるよう、今後も試行錯誤しながら努力していきたい。

20. 岐阜県可児市内の東海自然歩道におけるセルフガイドシステムの構築—携帯電話カメラ機能を利用したQRコードの読み取りによる情報伝達—

相田 明・藤原宣夫・安藤理恵・大嶽和憲・
足立健一郎（岐阜県立国際園芸アカデミー）

岐阜県可児市内の東海自然歩道の利用者の利便をはかるため、携帯電話カメラ機能とQRコードを活用した、高度な技術もいらず安価なセルフガイドシステムを構築した。このセルフガイドシステムは、①文字、画像だけでなく音声や動画による情報提供ができる、②案内板や印刷物と違い容易に更新ができるといった特徴がある。ホームページアクセス数

は140件（2007年4～9月）である。今後、ヒアリング調査を通じて改善を図り、また、東海自然歩道の新ルートの提案も行なう予定である。

21. 環境学習施設の計画におけるエコロジカルデザイン

丸山 昇（創建 LDグループ）

筆者は、平成8年度に自然とのふれあい、自然教育を推進する拠点として「西尾いきものふれあいの里整備計画」策定に関わって以来、住民参加によるビオトープづくりや河川づくりなどを「自然との共生」をテーマとして扱ってきた。平成17年度には、「豊田市自然観察の森及び周辺地域基本計画」、「伊勢志摩国立公園横山ビジターセンター改修計画」等において、環境学習施設の計画に携わることができ、環境学習という視点からのこれらの施設計画について概観する。

22. 名古屋市街区公園に対する評価のバラツキについて

岡村 稔・山田亜津子（名古屋市立大学芸術工学部）

名古屋市の街区公園及び近隣公園の評価について、前者は人工的に整備された方が、後者は自然が多く取り入れられて整備された方が、それぞれ評価が高い傾向があることを報告した。本報告では、名古屋市郊外の街区公園の評価について、自然とのふれあい・高齢者の使いやすさ・イベントの容易さ・静かさ・遊具の多さなどの項目について、周辺住民の性別及び年齢の違いによる評価のバラツキについてアンケート調査した結果を報告する。

23. 社寺に隣接する都市計画公園の形態的特徴について—都市計画公園と社叢（鎮守の森）の一体的活用に関する研究—

長谷川泰洋（名古屋市立大学芸術工学研究科）

岡村 稔（名古屋市立大学芸術工学部）

名古屋市は、市域の8割が土地区画整理事業で整備された計画都市である。西部の耕地整理から始まり、都心部では戦災復興区画整理、郊外部では組合による土地区画整理が行われた。その際、神社や寺院の敷地と隣接した公園が各所に計画され、神社に隣接する公園が49、道路を隔てて神社に隣接する公園が30、寺院に隣接する公園が22、道路を隔てて寺

院に隣接する公園が33カ所存在する。これら公園の中で、神社と隣接する都市計画公園について、市内における配置の特徴を、また神社に隣接する街区公園と近隣公園について、敷地形態ごとの分類を行い、その形態的特徴について報告する。

24. 「景観整備機構」指定取得の意味

西島弘一郎（日造協静岡県支部）

日造協は、緑の景観創造事業をめざしている。これを達成するために5つの目標を掲げている。その1に挙げているのが、景観の保全と快適な都市環境づくりである。景観整備機構とは、施行された景観法に規定されている良好な景観を形成するために、景観行政団体（県・中核都市等）が指定する調査研究を行うNPO法人や、公益法人のことである。指定を受けた日造協として活動することは、行政、地域住民と協働した新たな事業の創造、情報の先取り、如いては、造園の事業領域の拡大につながることである。また、企画・計画の段階から関わることは現在日造協が目指している方向、即ち創造と一致するところである。

25. 国土形成計画 広域地方計画におけるランドスケープからの提言

井上忠佳（創建）

浅井正明（名古屋市東山公園協会）

阿蘇裕矢（静岡文化芸術大学文化政策学部）

梶野保光（愛知県田原市役所）

佐々木邦博（信州大学農学部）

国土形成計画の策定に際しては、国土管理の重要な視点として、「ランドスケープの形成」が、施策の方向性の一つとして提案されている。国土形成計画の広域地方計画の策定に際して、新たな価値観として「ランドスケープ」が、単に「景色や風景」のみを示す言葉では無く、「当該都市や地域、さらにその集合体としての国土が過去に経験した人と自然との関わりや培われた歴史・文化を含めつつ、現在の姿を表現するものである」ことを基本理念の中に位置づけ、あわせて国土形成の骨格として良好なランドスケープの保全、再生、創出に係わる社会的・制度的位置づけを明確化する必要がある。本論は、中部圏における過去の広域計画における、自然的環境や緑地保全等の扱われ方を確認するとともに、中

部圏において国土形成計画における広域地方計画において検討すべき課題を抽出して提言する。

【ポスター発表】

1. 生物多様性とみどりの街づくり

ランドスケープコンサルタンツ協会中部支部
中部支部会員がこの中部地方に関わった「みどりの街づくり」、とりわけランドスケープエコロジーの基本構造であるパッチやコリドーとしての多様なみどりの空間(公園緑地・里地里山・湿地水辺・河川水路・道路・建物など)における、生物多様性の保全に関する調査・計画・設計事例を提示する。

2. 国土形成計画 広域地方計画におけるランドスケープからの提言

井上忠佳 (創建)

浅井正明 (名古屋市東山公園協会)

阿蘇裕矢 (静岡文化芸術大学文化政策学部)

梶野保光 (愛知県田原市役所)

佐々木邦博 (信州大学農学部)

(口頭発表25と同題により省略)

3. 社会・環境緑地評価システム：SEGES (シージェス)

上野芳裕 (都市緑化基金調査部調査課)

(口頭発表11と同題により省略)

4. 園芸療法プロジェクト「癒しの庭出前します」の展開

多田 充 (岐阜県立国際園芸アカデミー)

蘇 敏 哲 (筑波大学大学院)

井口百合香 (NPO法人つくばアーバンガーデニング)

筆者らは園芸療法の普及を阻害している大きな要因を①〔ハード面〕場所・設備の不足、②〔ソフト面〕人的資源の不足・プログラムの未整備、③〔資金面〕資金不足の3つであると考え、これらに対応することを目標とした「癒しの庭出前します」プロジェクトを開始した。

5. 靴職人の裏庭 in Paris—第9回国際バラとガーデニングショウ出品作品—

吉村俊紀・上野 恵・野中 如・服部郷子・

細江初奈・香川昌紀・土岐智彦・三島雄大

(岐阜県立国際園芸アカデミー 上級マイスター科)

第9回国際バラとガーデニングショウ カテゴリーB部門「優秀賞」。タイトル：靴職人の裏庭 in Paris。コンセプト：パリ郊外に住む靴職人の裏庭。歩道から見下ろせる北向きの狭い裏庭を、75歳の靴職人は、いつも作業場から眺めながら、靴を作り続けてきた。歩道を行きかう見知らぬ人々の足取りを感じながら。どこにでもある街角の様々な人間模様を、靴職人と裏庭は、変わることなくずっと見つめてきたのである。

6. トワイライト ～希望の光—第8回国際バラとガーデニングショウ出品作品—

細江初奈・安藤理恵・上野 恵・大嶽和憲・

田中修一・野中 如・服部郷子・吉村俊紀・

安井寛之

(岐阜県立国際園芸アカデミー 上級マイスター科)

第8回国際バラとガーデニングショウ カテゴリーB部門「準優秀賞」。タイトル：トワイライト ～希望の光～。コンセプト：くずれた壁 むき出しの鉄筋 荒れ果てた大地。すべてがなくなり希望さえ感じられないと思った。やがて年月を得て土地は光を受け、植物の再生が始まる。明るい緑。光を思わすような黄色い花。植物の再生とその色は私の心に希望を与えてくれる。本作品は、幅4m×奥行き3mの空間に高木、中木、低木、花、下草などを組み合わせ、「荒れた大地にもやがて植物が芽吹き、希望にあふれる場所へと変わっていく」ことを表現したものである。

7. 華麗なる絵画のように—フラワードーム2007出品作品—

服部郷子・上野 恵・田中修一・野中 如・

細江初奈・吉村俊紀

(岐阜県立国際園芸アカデミー 上級マイスター科)

テーマ：ヨーロッパクラシック。タイトル：華麗なる絵画のように。古き花の絵を見るようなノープルでクラシカルな花装飾の表現：本作品は、17世紀ヨーロッパの絵画に描かれているような花瓶に生けられた花からヒントを得て、来場者が、本作品の前に立ったとき、美術館で絵画を鑑賞しているかのような錯覚に陥る作品にしたいと考え出したものである。

口頭発表

1. 片桐邸庭園調査

福原成雄 (大阪芸術大学環境デザイン学科)

約400年の歴史を持ち漢方の専門薬局として知られる片桐邸は堺市の北部、紀州街道と阪堺線とに挟まれた中筋の中ほどに位置する老舗の漢方専門店である。敷地内には江戸時代後期に建築された主屋をはじめとする建築物があり、主屋前の坪庭と坪庭に続く東側に築山林泉式庭園が広がっている。築山林泉式庭園は、南海電車に接する東側沿いに眺望を意図した築山と、岩山の築山を築き、築山中央部から滝を落とし、滝口前の高みに自然石の石橋を架け深山幽谷の景を現している。溪谷に架かる石橋下部からの流れが岩山を回り込むように流れ下り、岩山の取り付きに沢飛石を配石し、築山の表情を豊かにしている。庭園の調査と修復について発表する。

2. 動物園計画におけるランドスケープデザイン

若生謙二 (大阪芸術大学環境デザイン学科)

近年の動物園には、種の保存や環境教育の場としての役割が求められており、その計画や設計にはたすべきランドスケープデザインの役割はきわめて大きくなっている。動物園は保護のメッセージを伝える空間メディアである。生き物を生息させ、展示する空間としての動物園はいかにあるべきか。そこにはランドスケープを創出し、構成するデザイン力とともに、生命観、環境観を空間デザインに反映する空間的技術が求められる。野生生物の生命にむきあい、利用者の意識に働きかける空間を創出する技術的課題は何か。これらを具体化しつつある近年の国内外の事例にふれながら、動物園設計の造園技術的課題と方法について論じる。

3. 都市広場の多義的空間を創出するデザイン規範に関する研究

加我宏之 (大阪府立大学大学院生命環境科学研究科)

岡田 武 (株式会社岡村製作所)

下村泰彦・増田 昇

(大阪府立大学大学院生命環境科学研究科)

都市広場として賑わいを見せている大阪市中央区のビックステップ、東京都千代田区の東京国際フォーラムを対象に、利用・維持管理規約と空間・利用

特性を探ることで都市広場の多義的空間を創出するためのデザイン規範を探った。都市広場の多義的空間を創出するためには、管理規約によって予めイベント空間を指定し、多様なイベントの誘致や発生を可能とさせることが重要である。指定したイベント空間はイベント専用空間として特化させず通常時には動線空間や滞留区間となる位置に設定することでその賑わい性が創出されやすくなることが明らかとなった。

4. 街路樹のある街路空間における現地・スライド評価実験による心理評価の比較研究

遠藤裕志 (和歌山大学大学院システム工学研究科)

山田宏之 (和歌山大学システム工学部)

本研究は、街路樹の果たす心理的効果を評価・検証する際に行なわれているスライドを用いた評価手法の妥当性を検証する事を目的とし、現地及びスライドにてSD法の評価実験を行なった。各評価実験結果に対し因子分析を行なった結果、心理的、眺望的、空間的評価因子がそれぞれ抽出され、街路樹の評価構造に大きな手法差は見られなかった。また、心理的、眺望的評価因子の因子得点を用いてクラスター分析を行なった結果、一部の街路でスライド撮影法の影響で街路情報が十分に表現出来なかった事等から手法差が見られたが、ほとんどの街路で各手法の評価結果は同一クラスター内にまとめられ、スライドによる評価の妥当性が高い事が示唆された。

5. 都心部オープンスペースの周辺環境と人々の滞留行動との関係に関する研究

野々村真輔 (株式会社ニュージェック)

杉本正美

かつての総合設計制度等の導入により、都心部にはオープンスペース (以下OS) が積極的に確保され整備されてきた。しかし、個々に整備されたOSは、それらを取り巻く周辺環境を十分に配慮せず、公共性の乏しい単なる空間として計画されている場合が多い。本研究では、複数のOSを対象に、同時刻での各OSの滞留行動特性に着目し、各OSをとりまく周辺環境の構成要素とどのような関係にあるのかを構造的に導き出すことを目的とした。結果、例えば周辺環境の建物用途や立地等によりOSの滞留特性が説明できることを明らかにした。研究を通

して、周辺環境に適合し、都心部の公共性をより高める空間としてのOSの展開が可能になると考える。

6. 都市公園における快適性と防犯性の両立に関する研究

横田真美 (和歌山大学大学院システム工学研究科)

山田宏之 (和歌山大学システム工学部)

我が国の都市において、公園緑地の機能を損なわず防犯性をいかに高めるかというところが課題となっている。そこで本研究では、都市公園において快適性と防犯性の両方を満たすための条件を明らかにし、今後の公園緑地の防犯計画の発展に役立てることを目的としている。利用実態調査から快適性の把握を、また環境条件すなわち見通しと夜間照度の測定から防犯性の把握を試みた。その結果、快適性と防犯性を両立させるための条件として昼間は広々とした芝生地や水辺が必要で、夜間は園路が必要であることを明らかにした。両立できなかった場所に関しては本研究をもとに、その周辺に人を誘引する施設を設置し監視性を高める必要があると考察した。

7. 子供の遊び場に関する研究

福原成雄・大瀬英子

(大阪芸術大学大学院芸術研究科)

家庭での教育が問われる中、現代の子供たちの遊びに関して危機感を抱いた。ほんの数十年前までは、当たり前であった路地や小川・神社の境内や公園等を見てみても、今は数えるほどしか子供の姿をみられなくなった。限度を超えた宅地開発や交通の発達などにより、子供が安心して遊ぶ事ができる場所は確実に減り続けている。加えて、塾通いや習い事をする子が増え、子供が遊びにかかる時間も減り、凶悪な犯罪や無謀なドライバーが引き起こす交通事故も後を絶たない。以上のように、社会背景や教育・都市デザインなど複雑な諸問題がもたらした遊び場の危機的状況を見直し、今回の調査報告では、都市での遊び場に的を絞る、研究した。

8. 現代における遊びの多様性を生み出すための要件に関する研究—プレーパークを事例として—

宮崎由美子 (神戸市建設局)

加我宏之・下村泰彦・増田 昇

(大阪府立大学大学院生命環境科学研究科)

プレーパークを事例として、現代の子どもの遊びの多様性を生み出すための要件を探った。遊びの多様性を創造するためには、子どもの自由な創造性や自然に関する知識を深めるプレーリーダーの存在、火遊び等の危険を伴う遊びでの地域のサポート、現地での材料調達を可能とする自然環境の存在が重要であることが明らかとなった。また、広場型空間は、多様な遊びを成立させる上で不可欠であるが、ここでは従来避けられてきた料理遊びや火遊びなどの活動を可能とする許可申請の仕組み、遊びをサポートする収納施設、上水道等の設備を付加することでさらに遊びの多様性が高まることが明らかとなった。

9. 世界の丸い家

狩野忠正 (大阪芸術大学環境デザイン学科)

世界には丸い平面形の住居が多く存在する。そして、いまだに住み続けていることに驚かされる。丸い形の家は地域のシンボルとなっている。そこに住む子供達の夢なのである。丸い形が成立するのは地域性、歴史性が深く関わっていると云えよう。その地に観光で訪れた人々の心のよりどころとなっている。丸い形の家を背景に記念撮影をしている光景をよく見かけた。丸い形の家にはそれぞれの国の地域性、歴史性を考える鍵がある。丸い家の国は、スペイン、イタリア、トルコ、アフリカ、中国、モンゴル、韓国、ニューカレドニア、日本、である。

10. 地図

末吉康二 (大阪芸術大学大学院芸術研究科)

地図を使って「都市の形や歴史」を理解する。それを今後の都市計画等に用いる。都市を理解することは容易ではない。まず全体を把握して細部を調べ、都市の出来方の背景を知る必要がある。理解するには見るポイントを絞る必要がある。そのポイントは地図からわかる「道」や「地形」に的を絞る。

11. サンフランシスコベイエリア、ナパ川にみる洪水対策と都市デザインのあり方

松久喜樹 (大阪芸術大学環境デザイン学科)

サンフランシスコ湾はランドスケープデザインの基盤である立地条件が大阪湾と似ているところが多く、都市形成の発展から比較研究する点において最適と考えられ、大阪ベイエリアの可能性を探る点に

においても興味深い。最近の数ある新しい動きの中でも、サンフランシスコベイエリアに注ぐナパリバーの河川改修プロジェクトは注目に値するビッグプロジェクトと言えるであろう。自然環境の保全と回復の視点に立ったフラッドリバーが手法であるが、同時に流域環境の景観や利用をうまく取り入れた町の活性化に取り組んでいる。その計画のプロセスや意義を考察する。

12. 全国都市緑化おおさかフェア「まちなか会場」の成果と市民緑化活動推進の方向性

小西 昭 (大阪市ゆとりとみどり振興局)

春田由貴子 (株式会社 総合計画機構)

全国都市緑化おおさかフェアでは、主会場である大阪城公園に対して、市内全域を対象とし、市民と行政の協働による「おおさかフェア」を身近な場所で展開していく場として「まちなか会場」を設定した。街路や公園、公共施設や学校、民間施設や商店街などで、市民が主体的に取り組む花と緑の活動の場所そのものを「まちなか会場」とし、サインプレートの設置、まちなか会場マップ・ガイドブックの作成・配布などのPRを行った。特別な助成がないにもかかわらず、「まちなか会場」には積極的な市民の参加が得られた。都市緑化おおさかフェアは、地道な市民の活動にスポットライトを当て、活動する市民同士が交流を始めるよい機会となった。

13. 京都市南部の横大路沼干拓地における埋土種子による水生植物の再生

今西亜友美・松本 仁・今西純一・

森本幸裕・夏原由博 (京都大学)

京都市南部の横大路沼干拓地の一部において、2006年に環境省RDBで絶滅危惧II類に指定されているオニバス、ミズアオイが出現した。横大路沼干拓地の埋土種子からの水生植物の発芽ポテンシャルを評価するため、出現地内の条件の異なる8地点から2006年11月に土壌を採取し、2007年3月から4水位条件(1日1回灌水、0cm・5cm・15cm水深)で土壌の撒き出し実験を行った。ミズアオイはいずれの水位条件からも発芽した。また、環境省RDBで絶滅危惧I類のイチョウウキゴケや京都府RDBで絶滅危惧種のみズオオバコ、要注目種のみズワラビが出現し、干拓後約60年が経過した横大路沼干拓地において水

生植物の埋土種子の発芽ポテンシャルが示された。

14. 竹林におけるヒメボタルの生息環境特性に関する研究

小山 基・上甫木昭春

(大阪府立大学大学院生命環境科学研究科)

本研究では、ヒメボタルを保全するための竹林の管理方法を探ることを目的とし、大阪狭山市の旧西除川沿竹林を事例として、管理度合いや環境特性の異なる竹林内でのヒメボタルの幼虫の個体数を調査し、生息環境特性との関係性を解析した。その結果、竹林におけるヒメボタルの生息環境特性としては、土壌温度が低く、積算日射量が少ない場所であり、傾斜角度が急で、地表面が落ち葉で覆われており、草本があまり生育していない場所が適していると考えられる。また生息環境の保全に当たっては、竹密度、地表面の状態を適切に管理する必要性が示唆された。

15. 都市住民による春季・夏季の里地・里山林における環境保全プログラムの特性とそのリラクゼーション効果の関係性に関する基礎的研究

上原三知 (神戸芸術工科大学デザイン学部)

大阪府と民間とのPFI事業として箕面市で展開する水と緑の健康都市事業地の里地・里山林を対象として一般市民と行政の連携により企画・実施された環境保全活動の特性とそのリラクゼーション効果との関係性を検証し、以下のことが明らかになった。1) 里山林の林縁部を中心に多様な環境保全プログラムが企画・実施されているが、平坦地や里林内における面的なプログラムが乏しい。2) 多様な目的(環境学習、ビオトープづくり、農業体験)に合わせたプログラムによって、結果的に参加者のストレスが軽減され、活気が高まるというリラクゼーション効果が期待できる。3) 作業内容の簡素化や、適度な休息の確保によって、疲労感を軽減した高齢者や子供も楽しめるプログラムへの改善が可能である。

16. 介護老人保健施設和佐の里における園芸療法環境利用実態について

入船嘉之 (和歌山大学大学院システム工学研究科)

認知症予防に園芸療法が注目されている。しかし、その効果、実施形態、実施環境等の体系的な検証は

あまり進んでおらず、現在、様々な角度からの検証が課題となっている。本研究では、和歌山県日高郡の介護老人保健施設和佐の里を対象に、2006年7月27日より2007年2月15日の期間まで園芸療法プログラムにボランティアとして活動に参加し、園芸療法活動の実態状況調査、設備の使用状況調査を行った。本研究より園芸療法用庭園内の設備に使用頻度に偏りがあることがわかった。調査対象とした認知症高齢者用園芸療法プログラムにおいては、水道設備について最も使用頻度が高く、畑等については使用頻度が少ないことがわかった。

ポスター発表

1. 淡路島の小規模ため池群におけるトンボ類の分布の空間的自己相関と環境要因

一ノ瀬友博（兵庫県立大学自然・環境科学研究所）
石井潤（東京大学大学院）・森田年則（兵庫県）

兵庫県淡路市の黒谷地域に谷筋にそって小規模ため池を38ヶ所選定し、2002年5月から10月までの6ヶ月間に合計9回のトンボ類の分布調査を行った。トンボ類の分布に影響を及ぼす環境要因として、2002年5月から毎月1回、1年間にわたって取得した水質データ、2500分の1国土基本図とカラー空中写真を基に作成した土地利用図を用いて算出したため池周辺の土地利用構成比率、ため池のコンクリート護岸率を設定した。調査の結果、28種、1568個体が記録された。トンボ類の種数、個体数ともに、ため池の水域面積と有意な関係は見られなかった。トンボ類の空間的自己相関を算出し、その上で環境要因との関係を明らかにした。

2. 剪定枝葉を利用したウッドチップのマルチング材としての水ストレス緩和効果

原田麻美（兵庫県立淡路景観園芸学校）
大藪崇司・一ノ瀬友博
（兵庫県立大学自然・環境科学研究所）

剪定枝葉は再利用可能な資源であるが、その需給バランスは崩れ、処理が困難といえる。そこで、剪定枝葉を利用したウッドチップのマルチング材としての水ストレス緩和効果を検証し、チップの利用促進に繋げるため、降雨量が少なく水ストレスがかかると考えられる国営明石海峡公園淡路地区内のカワ

ズザクラ39本を対象とし、株元の芝を剥いでチップとマサ土を各々敷いた区と芝のままの区を設け、2007年8月から10月まで土壌では地温、土壌水分を、樹勢では光合成能、SPAD値、樹幹表面温度を測定した。その結果、チップ区が他の区より長期間土壌水分を保つことで光合成能・SPAD値が高い値を示し、樹幹表面温度が下がることが期待できる。

3. 農業集落内に植栽・自生している樹木の管理・利用状況

寺澤祐子（兵庫県立淡路景観園芸学校）
一ノ瀬友博・美濃伸之・藤原道郎（兵庫県立大学自然・環境科学研究所/兵庫県立淡路景観園芸学校）

農村地域において、樹木は景観要素のひとつである。そこで、維持管理作業の主体である土地の所有者にとって、樹木はどのような意味・役割を持つのかを把握することを目的とした。調査は、兵庫県淡路市の棚田の広がる農村地域において行った。田畑、ため池の畦畔・法面など、農地周辺に存在する樹木の発生理由、利用方法、管理作業、問題点について土地の所有者7人（樹木数16）にヒアリングを行った。その結果、樹木を発生理由・利用方法にもとづき、(1)植栽—食用型、(2)植栽—その他利用型、(3)自生—利用型、(4)自生—無活用型、の4つのパターンに分類できた。これらはパターンごとに利用の度合いが異なり、管理状況に違いが認められた。

4. 瀬戸内海の離島における共有資源（里山・里海）の持続的な利用形態と歴史文化景観との関係性の基礎的考察

上原三知・齊木崇人
（神戸芸術工科大学デザイン学部）

早くから製塩等の商品生産が発達した瀬戸内海では、森林資源の枯渇が深刻化したために我国でも最も古くから割山や個人所有林を制度化してきた。このような島々の終戦後の植生・土地利用における地域資源の質と量から土地均分のための地割および土地割替制度の地力維持・林相保存機能の検証結果を報告する。1.土地均分のための地割制度および定期割替制度が発達した歴史ある地域（島）では、江戸の土地公有・共有制度が崩壊し、資源の収奪が顕著であったとされる1950年代（第2次世界大戦後）においても、自然度の高い常緑広葉樹林を面的に維持

させていた。2.土地均分の地割および土地割替制度を有する島々では、製塩・漁業などの資源の均分利用形態が陸域に応用することで、共有地の資源を枯渇させず、最大限に活用する特有の歴史文化景観を維持させていた。

5. 冬期の公園における休憩施設利用者への気象環境情報の提供

三浦弘之（兵庫県立淡路景観園芸学校）

一ノ瀬友博・美濃伸之・藤原道郎（兵庫県立大学自然・環境科学研究所/兵庫県立淡路景観園芸学校）

休憩場所を探すときの目安になる情報を提供するために、微気象環境の特徴をまとめた。兵庫県立淡路景観園芸学校内の一般公開ガーデンの各ベンチで気温と積算日射量を測定した。また、学内の定点観測データも用いた。各時間の最低気温の地点を基準とした気温差を見てみると、2月4日と5日に気温差の特徴的な傾向が現れた。そして、定点観測による風向・風速、気温、日射量との関係を見ると、風向の影響があると考えられた。北東の風では地点5や6、南東～南の風では地点9、10、11において、他の地点より気温の高い傾向が見られた。風の穏やかな晴れた日における冬期の気象環境の特徴は、風向やベンチ周辺の環境の影響を受けると考えた。

6. 航空機レーザスキャナを用いた都市緑地における葉面積指数と天空率の推定

佐々木剛・今西純一・伊尾木慶子・森本幸裕

（京都大学大学院農学研究科）

北田勝紀（中日本航空）

航空機レーザスキャナによって得られた点群データから、大規模都市緑地における葉面積指数、天空率の精度の高い推定を試みた。用いたレーザスキャナは、1回の発射で1stパルス、Lastパルスの2点が記録されるダブルパルス方式である。地表面をとらえていると考えられる点をGroundクラスに分類したあと、レーザスキャナデータから算出される様々な変数と、現地で計測した葉面積指数、天空率との関係を調べた。レーザ発射数に対するGroundクラスの点の割合が、葉面積指数と天空率の両方において、現地調査の結果と高い相関を示し、推定のための指数として有効であると考えられた。

7. 打ち水による都市構造物表面温度低減効果と体感温度低減効果に関する研究

村部直樹（和歌山大学システム工学研究科）

山田宏之（和歌山大学システム工学部）

近年、ヒートアイランド現象などにより都市部での熱環境が悪化している。そこで、2003年夏、土木研究所が、都内で散水可能とみなされるエリアに、1㎡につき1ℓずつ水をまいたら気温は2℃下がると試算した。この理論を社会実験に仕立てようと、打ち水大作戦が全国の都市部で行われ始め、昔ながらの知恵である打ち水が現在、注目されている。しかし、実際に打ち水が行われた場合の詳細なデータは、ほとんどないのが現状である。本研究の目的は、科学的に打ち水の効果を様々な条件下で比較検証し、夏季における屋外の涼しい空間の造成手法を提案することである。

8. 遊具事故ゼロを目的としたマネジメントの実践

中橋文夫・永井英樹（環境設計株式会社）

大阪府営公園では「遊具事故ゼロ」を目標にして、リスクマネジメントに取り組んでいる。わたし達は、それを受けて、公園の利用者、管理者、設計・施工者が一体となった包括的な管理を行う「三位一体のマネジメント」を企画し、実践した。課題として、管理作業の効率化(情報管理)、点検技術の向上(品質管理)、利用管理の徹底(利用管理)があげられ、わたし達は、遊具の安全、安心利用を目指して「思いやりから生まれるマネジメント」をコンセプトに掲げ、以下の作業の取り組みを行った。(1)管理者への思いやりとして、蓄積された大量の図面仕様書を、ITによる遊具管理システムの構築、(2)遊具への思いやりとして、現場管理員の講習会を開催して、安全点検技術の向上による遊具のケア(物的ハザードの除去)、(3)子ども達への思いやりとして、パンフレット等を用いての安全利用の啓発による事故防止(人的ハザードの除去)を目指した。(委託者：(財)大阪府公園協会 期間：平成18年度)

9. 環境と生活が調和するまちづくり

西田政弘（NPO法人羽曳が丘E&L）

その昔、日本武尊が白鳥になって、羽を曳いて丘を飛んだ姿から「羽曳野」という地名ができた。私たちのまち羽曳が丘は、昭和37年から住宅開発が開

始され、現在、人口約1万人の街になった。平成16年にはNPO法人羽曳が丘E&Lを設立した。最近ではスポーツ公園・ビオトープ・オオタカの里山などを拠点にした環境保全活動と、惣菜の調理宅配、交流サロン、集会所の管理運営と葬祭事業などを実践しているが、これら複数事業の地域資源を循環して環境と生活が調和するまちづくりをめざしている。しかし、これからのまちづくりには市民と行政との協働から新たな公共の担い手へ向う大きな課題がある。

10. 京都市南部の横大路沼干拓地から出現した絶滅危惧種オニバスの保存

今西亜友美・松本仁・今西純一・森本幸裕・夏原由博（京都大学）

太田周作・井上雅裕（財団法人京都市都市緑化協会）

京都市南部の横大路沼干拓地の一部において、2006年に環境省RDBで絶滅危惧II類に指定されているオニバスが出現した。横大路沼および近接する巨椋池は約60年前に干拓され、オニバスを含む多くの水生植物が絶滅した。オニバス保存のため、出現地にて種子を採取し、京都大学、京都市梅小路公園、京都府立植物園の3箇所で開催している。梅小路公園内のビオトープいのちの森では、6つの池でオニバスを食害するアメリカザリガニが見られるため、その内の1つの池で実験的にアメリカザリガニの駆除を行い、オニバスの移植を試みた。

11. 株式会社トンボ ビオトープ活動

小桐 登（株式会社トンボ 環境事業企画室）

社名のトンボにちなみ、日本の旧名であるトンボ（秋津）が雄飛する美しい環境作りと人づくりを目指してビオトープを核とした様々な活動を展開している。①学校ビオトープ作り支援②環境授業サポート③学校ビオトープメールマガジン発行④学校ビオトープコンクール協賛⑤ビオトープづくり支援⑥自社ビオトープについてポスター発表を行う。

12. ローソン「緑の募金」とその緑化貢献事業

株式会社ローソンCSR推進ステーション

CO₂の吸収・貯蔵、土砂災害の防止、水の保全など、さまざまな働きを持つ森林を将来に残すために、ローソンでは1992年からローソン「緑の募金」活動

を展開している。全国の店舗に寄せられたみなさまの善意は、社団法人国土緑化推進機構を通じて、国内外のさまざまな森林整備活動を支えている。これらの活動には、加盟店のオーナーさんや店長さん、クルー（パート・アルバイト）さん、また本部の社員も参加し、森林保全のために活動している。みなさまからの善意にローソン本部寄付金を加えた累計は、22.9億円（2007年2月末日現在）。これまで支援した森林整備活動は国内外1,528カ所、面積は4,510haおよび、植樹や間伐などの手入れをした森林の木の本数は約1,127万本を超えるまでになった。

13. 西川緑道公園の再生

水と緑の回遊都心をつくる会（協力：西川塾）

岡山市の都心を南北に貫く「西川緑道公園」は、初期整備から30年以上経過し、社会背景や意識の変化にあった新たな魅力づくりが求められている。予定している展示では、一部区間（約240m）について、公園再生案のモデルとしての提案を行う。具体的には、植栽調査（毎木調査）を基礎として“緑のデザイン”の提案を行う。さらに公園沿いの車道を取り込んだ歩行者空間整備や、沿道施設との一体感醸成などの“空間デザイン”の提案を行う。なお今回の発表内容は、5月に行なわれた日本造園学会全国大会におけるポスター展示に、提案の実現に向けたその後の活動内容などを盛り込んだものである。

14. 自然環境（ビオトープ）をキーワードにした緑のネットワーク

瀬口和矩・米本桂子

（特定非営利活動法人ビオトープネットワーク京都）

山や海など本来の自然環境の営みそのものがビオトープであるが、10数年前から学校にビオトープをつくり環教教育に生かしたり、公園緑地のエコアップ、企業CSRで学校ビオトープの支援や自らの敷地で生きものや人々の地域の中での繋がりに貢献したり、ビルや住居の屋上や公開空地にビオトープ的な視点で緑化を行うところも出てきた。近年、温暖化対策等の環境改善として森の効用も認識され始めている。本来の自然環境を守るためにまちなかにビオトープをつくり、それらをネットワーク化していくこと、それを遂行するために多くの人々が関わること、自然と人が繋がるのが大切である。

口頭発表

1. 福岡北中央部を中心とした鳥相と緑被率との関係

福岡 亘・岡本 均 (西日本短期大学緑地環境学科)
都市内緑地は、都市内や周辺域に生息する生き物にとって、生息空間の場としての側面も持っている。そのような都市内緑地と鳥類との関係について、福岡市中央区周辺域での調査は、あまり見られない。そこで本調査は、福岡市中央区北部域の公園を中心に、ポイントセンサス法による鳥類調査をすると共に、地理情報システム (GIS) を利用し、基礎データの構築を進め、周辺域の緑被率を抽出、鳥類との関係を解析した。その結果、調査地点周辺の緑被率の違いによって、鳥種、総個体数、鳥類多様度指数との相関関係があることが明らかになった。特に、調査地点から半径250m内における緑被率の違いが、鳥類に影響を与えている可能性を持つことを提示した。

2. 建築リサイクル資材を用いた屋上緑化用人工土壌について

竹内真一 (南九州大学)
中寫裕之・石井明 (久留米高専)
野下兼司郎 (兼定興産株)

屋上緑化植生基盤には軽量であることが重要な要素である。従来用いられてきた天然素材は資源の枯渇などにより継続的な入手が困難になる場合も想定される。本研究では建築リサイクル資材を用いた人工土壌を対象にSEMによる観察、透水性試験、有効水分量の検討などの特性評価ならびに現場試験を行った。本土壌は粒子内に多数の孔隙があり、透水性が良好であることと、保水性は若干低めであるが有機物の混入により改善されることが示された。また灌水条件下の屋上における試験では、シバの生育状況や温度緩和効果など他の既製品と比べ、遜色の無い性能が確認された。今後は長期暴露試験など更なる検討を進める予定である。

3. 希少種ゲンカイワレンゲの分布状況および周辺植物について

岩本辰一郎 (株エコプラン研究所)
大澤啓志 (慶應義塾大学総合政策学部)

本研究では、土地利用の変遷に伴う福岡県のゲンカイワレンゲの分布状況、生育地周辺に同所的に生育する植物を明らかにすることで、本種の保護対策の知見を見出す基礎的資料とすることを目的に行った。分布調査の結果、本種は調査範囲の海岸線6km内では確認されなかったが、同属のイワレンゲが確認された。フロラ調査の結果より、小島では木本類が発達し、埋立地では草本類が形成された環境であることが窺え、さらに帰化植物率の比較では両エリアに顕著な差が見られた。これは、30年以前まで小島が離れ小島で、外部からの影響を受け難い立地であったこと、設立直後の埋立地は無植生状態の裸地であり、帰化植物等の侵入が容易な環境であったためと推察される。しかし、現在は陸続きになったことから、今後帰化植物等の侵入種が増加すると考えられる。

4. 棚田の石積み擁壁における植生の復元に関する研究

船越亜紀 (九州大学大学院芸術工学府)
重松敏則・朝廣和夫
(九州大学大学院芸術工学研究院)

本研究は、修復後の経過年数が異なる棚田の石積みに付いて秋季と春季に植生の回復状況を調査し、植被率と種組成の変化について明らかにすることを目的とする。1997年からの各年に修復された石積み法面と、既存の石積み法面の両方について植生調査をおこなった。調査から、棚田を石積みで修復すると時間が経つにつれて既存の石積みと共通する種が増加し、植被率も増加する傾向にあることが分かった。しかし、これは必ずしも経過年数だけが要因ではなく、石積みの立地や修復面積の違いも関係すると考察された。テイカカズラの繁茂、共通種の割合、植被率の変化から、修復後8~9年で石積み棚田の植生は安定し、回復するといえる。

5. ヤシオオオサゾウムシ被害樹 (フェニックス) の外観診断について

服部雅樹 (中村園芸場)
ヤシオオオサゾウムシによるフェニックスの被害は九州各県で確認されており、分布は確実に拡大している。被害樹を早期に発見し枯死に至らせないことが被害拡大防止においては重要である。被害樹に

見られた共通した樹形変化に着目し、被害樹の早期発見のための外観診断についての検討を行った。被害樹の樹形変化は被害に応じて推移していき、初期段階、中期段階、末期段階の三段階に区分できる。対象樹を全方向から樹形観察する外観診断方法を定期的実施することで、被害の初期段階での発見は容易なものとなる。定期的な外観診断により多くのフェニックスを管理していくことは、ヤシオオオサゾウムシ被害の拡大防止に効果的であると考えられる。

6. 南九州大学造園実習場におけるピオトープ創出活動

小松恒輝（南九州大学大学院）

竹内真一・西村吉英（南九州大学環境造園学部）

現在、学校ピオトープの整備ならびにピオトープを活用した教育プログラムが盛んに行われている。南九州大学造園学科においても、卒業研究・講義・実験等に活用するためのピオトープ実習場を既存の造園実習場内に整備する活動に着手した。本活動の目的は、実習場自体のピオトープとしての価値を評価すること、水域を設けることによる効果を検証することにある。ベントナイトを漏水防止に散布して2箇所のピオトープ池を造成し、メダカやハッチョウトンボに対する生育環境を評価した。本報では、この創出活動の背景やピオトープにおけるモニタリング結果を紹介する。

7. 航空写真からの樹冠情報を用いた針葉樹人工林の胸高幹直径と低木層植被率の推定について

梶原領太（九州大学大学院芸術工学府）

重松敏則・朝廣和夫

（九州大学大学院芸術工学研究院）

近年、森林の公益的価値が再評価されつつある。これらの評価に必要な森林情報の取得・管理は、GISの発展などによりその整備が進められつつあるが、林内の緑量や種多様性といった情報を衛星・航空写真上から得ることは困難である。本研究では、熊本県小国町宮原地区の針葉樹人工林を対象に、航空写真判読から得られた樹冠直径と立木密度の樹冠情報に基づき区分けを行い、度数階別分布図を作成した。さらに、樹冠情報と現地調査データを相関解析し、特に有意な結果が得られた胸高幹直径及び低

木層植被率について重回帰分析を行い、回帰式を求めた。これを対象地区全域に適用することにより、胸高幹直径及び低木層植被率の推定を試みた。

8. 放棄里山林における高木層の構造と低木層の種多様性についてグリーンピア八女を事例として

岡部達也（九州大学芸術工学府芸術工学専攻）

重松敏則・朝廣和夫

（九州大学大学院芸術工学研究院）

レクリエーション林における生物多様性を考慮した森林管理の指針を得るために、現地調査に基づき高木層の構造と低木層の種多様性との関係を考察した。対象となる里山林の区分には高木層の優占種を用い、針葉樹林においては、さらに高木層の構造からそれぞれ3タイプに区分し、調査を行った。その結果、低木層に出現する種数は、針葉樹林は間伐管理されず密生しモヤシ化した区分においては少なく、管理されている区分では比較的多かったが、風倒被害林が最多だった。そのため、レクリエーション林として種多様性を高めるには、従来の木材生産林よりも強度の間伐を行う必要があることが示唆された。また、コナラ群落は高木層が発達しても種多様性が維持されるが、シイ・カシ群落は高木層の林冠閉鎖に伴い、種多様性の貧化が見られたため、管理が必要と示唆された。

9. 都市における社会参加活動の視点からみた海辺利用の可能性に関する研究

西村 惇（西武造園株式会社）

包清博之（九州大学大学院芸術工学研究院）

社会参加活動とは、ボランティア、職業体験、自然体験、スポーツ・文化活動、環境美化などの、参加者の社会参加の効果を促す諸活動」である。福岡市の海辺においても、地域のNPOや子ども会等が企画した青少年の社会参加活動が数多く実施されている。しかし、都市の海辺においては、漁業・マリレジャーなど他の海辺利用との競合参加など、活動をするにあたっての問題が数多くあり、活動が制限されている。本研究では、青少年の社会参加の視点からみた海辺利用の可能性のある海辺を特定し、青少年の社会参加活動を支援するための計画的示唆を得た。

10. オフィスビルの屋外空間の記述から見た設計意図の変容に関する基礎的研究

耿 曉南 (内山緑地建設株式会社)

包清博之 (九州大学大学院芸術工学研究院)

本研究では、オフィスビル屋外空間の設計意図の変化を明らかにし、その変化を捉えることを目的とした。そのため、対象雑誌に掲載された作品について、屋外空間のとくに園庭部分の設計事例に関する言説から、オフィスビルの屋外空間の設計意図の変化について考察した。本研究を通してオフィスビルの設計意図に用いられた言語の変容と空間構成上の主な言語が把握できた。

11. 漁業集落の景観保全に資する視覚的要素と視点場との関係からみた地域特性の把握

豊崎修平 (九州大学芸術工学府芸術工学専攻)

包清博之 (九州大学大学院芸術工学研究院)

本研究は、漁港・漁業集落の地域特性を明らかにし、景観保全に資する配慮事項の把握を目的とした。調査にあたっては漁港とその周囲を取り巻く視覚的要素に着目した。まず、九州北部の玄界灘に面する第1種漁港の現況を把握し、各種の資料を用いて、漁港、集落、自然地の関係から調査対象候補地を設定した。そのうち、海岸保全基本計画で想定される事業から調査対象地を設定した。次に、調査対象地において、骨格スケールと現地調査を通じた個別スケールでの視覚的要素を把握した。この調査を基に、漁港が見える視点場と漁港を視点場としたときの視覚的要素を把握した。そこから、調査対象地ごとに配慮すべき漁港を取り巻く地域特性を把握した。

12. 文教施設等の分布特性からみた歴史的景観要素への接近性に関わる計画条件の考察

石田直也 (九州大学芸術工学府芸術工学専攻)

包清博之 (九州大学大学院芸術工学研究院)

佐賀市佐賀城公園周辺を対象に、歴史的建造物等の歴史的景観要素(指定文化財【建造物】・寺社及びその敷地のことを表す)までの接近性の改善に資する計画的示唆を得ることを目的とした。具体的には歴史的景観要素へとつながる街路や沿道の文教施設等や水路等、接近性に係わる要素の分布を指標に、佐賀城公園から対象地までの最短距離で取ったルートごとに考察した。結果、現状において要素が少な

く、接近性が潜在的に高まりにくいと思われるルートの中でも、数が多い要素もあることが認識できた。接近性を高める際に、この要素をルートの特徴として重視していくことによって、効率よく計画を進めていくことが可能であると考えた。

13. 小国町旧国鉄沿線の景観資源と自然遊歩道活用に向けた計画提案

高丘敦子 (九州大学芸術工学府芸術工学専攻)

重松敏則・朝廣和夫

(九州大学大学院芸術工学研究院)

本研究では、廃線になった旧国鉄宮原線沿いの景観資源を自然遊歩道として再活用する為に、現地調査に基づいた計画の提案を考察した。まず航空写真判読により、針葉樹林が5割を占める一様な景観構成であることがわかった。次に沿線上の景観構成を、地形・景観・植生の3点から7タイプに分類し、そのタイプごとに、植生と地域資源を有効に活用した遊歩道管理計画を考察した。また回遊性の可能性を探るために6コースの里道調査を行い、そのうち4コースの活用提案を行った。以上の結果を計画に反映し、自然遊歩道を多くの人に開かれたものにするためには地元住民の理解と行政の協力が必要不可欠であると考えられる。

14. 九州における自衛隊施設及び活動の存在からみた地域景観の形成条件に関する研究

谷口清範 (内山緑地建設(株)九州支店)

包清博之 (九州大学大学院芸術工学研究院)

自衛隊の活動は、航空機や演習の騒音等のマイナス面の影響が一般に広く知られるが、一方で災害派遣や公共公益施設への助成等のプラス面の効果もみられ、地域景観の形成に深く係わるものと考えられる。本研究では、こうした自衛隊施設に係わる市町村の地域景観の形成条件を探ることを目的とした。対象は九州の市町村とし、自衛隊施設の存在及び活動からみた地域特性、骨格的な自然の特性、社会的特性の3つの特性について把握し、各特性をオーバーレイした。その結果、自衛隊との日常的な接点が多様であり、かつ観光・リゾート資源の多様さやアクセシビリティの高さから、非日常的な活動が誘引される市町村の存在が把握された。

15. 地域特性からみた九州の主要な棚田の観光資源としての活用課題に関する考察

栗原なお（九州大学大学院芸術工学府芸術工学専攻）

包清博之（九州大学大学院芸術工学研究院）

本研究では、近年、良好な景観の維持が困難となっている棚田において、観光資源の視点からその維持のための課題に関する示唆を得ることを目的とした。対象地は九州内の「日本の棚田百選」47地区である。研究内容としては、まず、「百選棚田」を面積・勾配・立地といった基本的な地形条件から類型した。次に、「百選棚田」を車やその他の交通機関による接近方法によって類型し、「百選棚田」への近づきやすさを把握した。また、「百選棚田」の位置する市町村を他の観光資源の存在から類型し、「百選棚田」と他の観光資源の存在状況との関係を把握した。これら各類型結果を整理し、観光資源としてみた「百選棚田」は、地域特性によって異なる課題を持つことを認識した。

16. 熊本のアーバンフリンジにおける緑地保全に果たす社叢の空間特性

藤田直子（東京大学大学院農学生命科学研究科）

本稿の目的は、熊本のアーバンフリンジにおいて社叢空間が地域の緑地保全に果たす役割とその空間特性を明らかにすることである。市街化調整区域と市街化区域に接する地域をアーバンフリンジに設定し、GISを用いて空間分析を行った。その結果、①マクロスケールでは農業形態や産業形態との相関や形態の差異が認められ、特にパッチサイズとの関連と地形との相関があることが明らかになった。②メソスケールでは地域ごとに集落と神社の形態と社叢の残存度に差異が生じていることが判明した。③ミクロスケールでは地域単位の変化による神社の意味や機能性に対する価値観が各神社における社叢の有無やその状態に表出している事が明らかになった。

17. 学校ビオトープに対する考え方

植田 緑・北川義男

（南九州大学環境造園学部造園学科）

山本美紗代（株サンホーム）

現在、「自然と人間が共生できる社会」や「環境問題への主体的な取り組みへの参加」、「他の命の尊重」など様々な観点から環境教育が見直されている。

その中でも学校の敷地空間の見直しとともに、地域の生態系を生かして活動する場として学校ビオトープが重要視されている。授業やクラブ活動だけではなく、日常的な生活空間の一つとして様々な経験を積み場でもある。この学校ビオトープの活動について、1) 学校ビオトープの意義 2) 具体的な事例 3) 日本とドイツの運営体制の比較の全体を通して検討し、学校ビオトープに対する考えをまとめたものである。

18. 古庭園の維持管理に対する短大生の意識調査

—西日本短大1年生の場合—

西田益温（西日本短期大学緑地環境学科）

本研究の目的は、日本の古庭園における伝統的技術、維持管理に対する学生の意識を調べることにより、その教育のあり方をさぐることである。本学1年生を対象に、2004～2007年の4カ年においてアンケート調査を実施し、214名の回答の結果を分析、考察した。その結果、次のことが明らかになった。伝統的作庭技術が圧倒的に高い。女子ではとくに植物、花壇が高い。病虫害は最も低い。男子は女子よりそれらの意識は幅広く、高い。古庭園の維持管理に対する本学学生の関心は、理論型でなく実践型である。本学の授業が学生の意識に大きく影響を及ぼす。

19. 朝倉市秋月地方の水系と庭園について

田島基紀（熊本県立翔陽高等学校）

永松義博（南九州大学環境造園学部）

福岡県朝倉市秋月地区は藩政期の町並みを残し、当時作庭の庭園が多く残っている。庭園の特徴を実測や現地調査によって明らかにした。地区内には生活用水のための水路が張り巡らされ、これを利用した池泉式庭園である。水路及び水路沿いの庭園は各戸で独立したものではなく、水系ネットワークを形成し相互に結ばれている。

20. ベルギー人造園家ルネ・ベシエルの著述から見る整形形式庭園のデザイン原理

平岡直樹（南九州大学環境造園学部）

近代造園に整形形式要素を再生したベルギー人造園家ルネ・ベシエル（1908—2002）の著作『庭園の基本法則』の分析を行ない、整形形式デザインの現代的

意味と、その特徴や技術を考察した。その結果、現代の庭づくりで芸術性や創造性を発揮するには、風景式より整形式の方が可能性が大きいということ、平面幾何学式を成立させる大面積平面を確保するために敷地の高低差や排水、階段の処理技術が重要であること、対称的、図形的な構成の適用をただ推し進めるだけではなく、いかに人間に心地よく知覚されるかという、補正の技術、現代でいえば認知科学的な視点からの構成を目指し、極めて人間的な視覚性に則った原理の応用であることが明らかになった。

21. 福祉・教育施設での園芸活動の可能性について
大平 裕 (福岡県地球温暖化防止活動推進センター)
岡本 均 (西日本短期大学緑地環境学科)

藤原 隆 (福岡県農政部)

園芸活動は、福祉施設や学校に取り入れられている。しかし、作業内容や頻度および課題などの実態把握は十分とは言えない。そこで、福岡県内の1100箇所の福祉・教育施設を対象に、園芸活動の現況や花のアドバイザー制度への要望について質問紙法により調査した。85%の施設で園芸活動を行っており、期待感や充足感の向上などの効果が見られた。活動の課題は、日常の手入れ等の専門知識、指導者や資金の不足、今後の体制づくりなどであった。花のアドバイザーは、多様な課題に対応し、かつ各施設の要望に沿った活動や地域との協働が求められており、園芸福祉講座受講との連携において解決していくことが、適当であろうという知見を得た。

22. 「ひな山」に使用される植物について

塩崎千絵・永松義博 (南九州大学環境造園学部)

宮崎県綾町には藩政時代から桃の節句に「ひな山」とよばれる飾りを家の中に飾る風習が残っている。「ひな山」をつくる専門家は「ひな山師」とよばれる。綾町独自のひな山について3人のひな山師へのヒアリングをもとに歴史、使用される植物に込められた意味などを調査した。植物は、家族の絆と繁栄を願うための縁起木が使われることが多かった。

23. 盆に見出すパーク・アドミニストレーション

— 小山潭水の「民衆盆景」を視座において —

平嶋 孝 (株式会社大揮環境計画事務所)

本稿は、大正から昭和にかけて盆景家として活躍した小山潭水の先駆的活動に焦点をあて、「市民とともに 造園まちづくり」の進め方をパーク・アドミニストレーションの観点から捉える。小山は日本盆景協会を組織し、「民衆盆景」の普及を図りながら、地域社会の「アメニティ増進」、「アイデンティティの醸成」に貢献した。井下清などの造園人は、公園文化を培う上で重要な媒体として「盆景」を評価し、その活動を支援した。この支援はパートナーシップを基調にして市民の自発的な「市民力」を引き出し、「市民とともに」それを統合し総合力を高めるパーク・アドミニストレーションの思想が、この時代に根づいていたことを示す。

24. 植栽帯における維持管理の軽減について

— 一植生：クラピアによる防草対策 —

石川秀幸 (株式会社いづの造園)

経費削減が望まれる公共工事の中で、施工業社として取組む植栽維持管理工事。その中で街路樹の植栽帯における維持管理の軽減対策は、いかに雑草の繁殖を抑制するかである。そこで自社は、新植物であるクラピア (在来種のイワダレソウの交配種) による防草効果を検証する為に試験施工を行った。段階的に取組んだ試験施工の中で、実際に現道の防草対策と成り得るのかをクラピアの紹介とともに、実証と経緯を記した。クラピアについては現在も試験・調査中であるが、実用化へ向けて今後取組むべき植物であると思われる。

25. 一戸建て住宅団地における居住者の住宅庭の利用と植栽条件に関する研究

鈴木聡子

包清博之 (九州大学大学院芸術工学研究院)

住宅庭は居住者の生活が反映されて快適な庭となることが重要と考え、福岡市を対象に、開発年次が異なる一戸建て住宅団地をスタディエリアとして設定し、庭の利用特性と庭の植栽状況について調査、研究を行った。庭の利用特性は、庭の環境条件ごとに異なり、また、居住年数や家族構成によっても異なる。庭の樹木についても、居住年数や家族構成ごとに配植頻度が高い樹木が異なっていた。また、居住者の庭の利用に応じて、庭の樹木の種類数が増えることが示唆された。居住年数及び家族構成ごとの

庭の利用と植栽状況の関係を把握することにより、現在配植頻度が高い樹木以外にも、庭の利用に対応させると効果的な樹木があることがわかった。

26. 中国臨汾市中心市街地の環境と緑地に対する居住者意識に関する研究

張 侑男（九州大学芸術工学府）

杉本正美

齊木崇人（神戸芸術工科大学デザイン学部）

包清博之（九州大学大学院芸術工学研究院）

中国の山西省にある臨汾市は4年連続して世界で最も深刻な公害都市であると報道されている。市民の観点から見た臨汾市の都市緑地の整備課題を把握することを目的とした。研究方法は臨汾市の中心市街地の現状を把握した上でヒアリング（アンケート・インターネット）調査を行った。調査結果の中で【住まい周りの緑地の現況】、【住んでいる環境の満足度】、【希望する公園像】に関する設問についてクロス集計を行った。クロス集計の結果区によって緑に恵まれていると思っている人は住みやすいと思っている人が多く、緑に恵まれていないと思っている人は住みにくいと思っている人が多いということが認識できた。全市の中で4つの区に顕著な特徴があることが認識できた。

27. 瑞巖寺に関するイベントの報告

秦 忠広（九州大学大学院芸術工学府）

本稿は、熊本市苅町内にある瑞巖寺を対象地として以下に示す事項を行った。①瑞巖寺の履歴にもとづいたイベントを行いアンケートを実施した。②現状の管理状況の把握を行った。③①、②の結果をもとに自治会・老人会・まちおこしグループを中心に今後の瑞巖寺の管理について検討するワークショップを行った。以上の結果、瑞巖寺での体験が自己の履歴に刻まれている度合いが多く多様であるほど、その愛着が増すことが読み取れた。また、現状の管理状況から、地域住民が主体となった管理運営を希望する結果となった。

28. 都市公園の利用実態調査に基づく維持管理の在り方について

天本徳浩（崇城大学工学部）

道路事業など公共事業においては、費用対効果が

十分に説明されてから事業が推進されている。こうしたことから、都市公園整備においても費用対効果を分析するためのマニュアルが刊行されている。都市公園のすべての効果が把握されているわけではないが、新規に都市公園を造る上での指標を示している。しかし、著者が都市公園の利用実態を調査し分析した結果から、都市公園利用においては様々な要因が関係していることがわかった。また、都市公園などの施設は放置されると徐々に当初の魅力度が小さくなる。造るだけでなく、造った後の維持管理が十分なされないと十分な効果が現れないことも見受けられる。こうしたことから、都市公園利用者数を指標として、都市公園の維持管理にどれほどの重要性があるのか、定量的に推定できないものか考察する。

29. 指定管理者制度での公園運営管理の実際

前田宜重（株式会社山翠園）

水俣病の原因となった有機水銀ヘドロを浚渫埋め立ててできた都市公園区域22.8haの指定管理者として、“もやい直し”、“もやい創り”を公園管理運営の大きな柱として掲げ、より多くの人に公園を有機的に利用していただけるように公園の運営管理にあたっている。公園利用者や市民にいかにも喜んでもらえるかということを最優先に考え、公園の運営管理に反映させるべく、アンケート等の調査をおこない、利用者ニーズの把握に努めている。また、バラ園をオープンし、新たな公園の魅力づくりに取り組むとともに、園芸福祉の実践の場として障がい者の方々に活動していただいている。

30. くまもと緑の探検隊バスツアー

～市民と共に巡る熊本の巨樹・古木～

松本雄介（株式会社松亀園）

熊本市造園協会が一般市民向けのプログラムとして2年前より行なっている樹木巡りのバスツアーについて述べたものである。過去4回行われたツアーの行程を振り返り、コースの見所の紹介とそこでの特筆すべき樹木にスポットを当て、それぞれの樹木の素晴らしい点や、樹勢の衰弱等の問題点を浮き彫りにする事によって、これからの管理や保護のあり方について、また、それらに対しての市民の関わり方について考察を加えた。今後、巨樹・古木や緑の

保全のためには行政と設計・施工のプロの間で計画・立案した青写真だけではなく、実際にそこを訪れその素晴らしさを実感する一般市民の意見や考え、或は、設計や施工のプロではなくても樹木保護に携わっている人達等、色んな角度からの意見を反映させるべきだと述べている。

31. 郡築二番町・三番町樋門における保存と利活用に向けた市民協働型による整備プロセスの提案

川越浩正・平嶋 孝 (株大揮環境計画事務所)
山尾敏孝 (熊本大学工学部)

郡築二番町樋門 (国指定有形文化財)、郡築三番町樋門 (国指定重要文化財) は、熊本県八代市に位置する。これら2つの樋門は、建造から約70年 (二番町)、100年 (三番町) 以上経た今も現役の施設として使用されており、不知火海干拓施設群の中でも建造された時代とその歴史的背景、構造的な特徴、保存状況などから見て、最もシンボリックな文化遺産 (近代化土木遺産) といえる。本報告においては、これらの遺産を保存しながら有効に活用するために市民参加や協働による事業実施に向けたアプローチ手法と整備プロセスについて提案する。

32. 市民レベルでの緑化の取り組みについて

吉村昌洋 (株式会社皆楽園)

地球規模での気候の変化が騒がれる今日、ここ熊本においても現象が実感されるようになってきた。そのような中、そこで生活を営む人々は、もう少しの緑へ対する関心と、取り組みで多少なりとも環境や景観の改善に繋がるものであろう。また、みどりの役目や効果を知ることにより、より良い機能を持った緑化というものに変わっていく。小さい子供の頃からみどりとふれあうことにより、その楽しみ、喜び、大切さなどを学びとり、年を重ねてもその思いをいつまでも持ち続けられる環境を造っていくことが重要となり、住みよい町づくりや環境造りになっていくと思われる。我がふるさとを緑あふれる町にすべく緑化に取り組むことが大切である。

33. 自然・環境系イベントの参加者意向からみたNPO・ボランティアネットワークの提案

藤井義久 (九州芸術工科大学大学院芸術工学研究科)
福岡県志摩町を拠点とするNPO・ボランティア団

体が協同で開催した「ホテルの勉強と鑑賞会」での参加者アンケートから、NPO・ボランティアのネットワーク化のための手法を検討した。アンケートの結果、市民活動をすすめる上で、子供の健全育成は合意を得やすく、参加のきっかけにもなると考えられた。また、今後の参加意向は、男性が伐竹や植樹などの自然の中で体を動かす活動と竹細工・竹利用などのクラフトに対して、女性は、子供に手の掛かるうちは子供の健全育成に、子供が独り立ちするようになると安全な食をつくる市民農園と高齢者福祉に対して意欲を示したことから、これらをふまえた広報・活動プログラムが必要である。さらに、地域内のNPO・ボランティアが知り合う場を設けることが、会員数の増加や、行政や大学、企業との連携にもつながると考察された。

ポスター発表

1. 黒川温泉における風景づくりの取り組み

徳永 哲 (エスティ環境設計研究所)

黒川温泉「風景づくり」の取り組みは、そのスタートから概ね20年になる。地域住民が一丸となって、「ふるさと自然・暮らし・もてなし」の風景づくりを続けており、次のような三原則を持っている。

①郷土の雑木と親しみやすいスケール尺度により「なつかしさ」を演出する②傾斜地の特徴をいかし、地域の「暮らしぶり」が感じられる空間を大切にす③木材や土、漆喰などの天然素材をいかして、素朴な質感の建物、「和やかなまちなみ」を形成する。本ポスターセッションでは、地域ぐるみで取り組む「風景づくり」について、その概要を報告する

2. 都市と農山村の交流を目的とした若者の農林体験学習について

一福岡県黒木町での活動を事例として一

松藤有希 (九州大学大学院芸術工学府)

重松敏則・朝廣和夫

(九州大学大学院芸術工学研究院)

本研究では、都会育ちの青少年が体験を通じて、農山村環境に興味や関心を持つようになることを期待し、普段あまり農山村環境に接することのない小・中・高・大学生から社会人を対象とした2泊3日の農山村体験合宿を実施した。研究方法として農

山村や作業に対する意識変化を把握するために、体験前後にアンケート調査を行い、その解析と考察を行った。結果として、都市部で生活する青少年にとって今回の様なイベントや実習が農山村と関わる貴重な場であることが分かり、またほとんどの参加者が満足した体験であったことが分かった。今後は年齢に対応した実施期間の検討や、興味・関心を持たせたい内容に応じた作業プログラムを取り入れる必要があると考察された。

3. 里山保健休養林の保全と活用

ーグリーンピア八女を事例としてー

原 愛子 (九州大学大学院芸術工学府)

重松敏則・朝廣和夫

(九州大学大学院芸術工学研究院)

都市住民が自然に触れ合う機会の促進と、それによる都市と農山村の交流の進展が注目されている。本研究ではそうした場としての活用が期待される里山保健休養林として福岡県八女郡黒木町のグリーンピア八女を対象に、その現況把握を試みた。航空写真判読及び現地植生調査の結果、敷地内の樹林では竹林の拡大や針葉樹人工林の風倒木被害、落葉広葉樹林の荒廃等がみられ、継続的な管理が求められることが明らかとなった。これらの樹林の特徴を踏まえ整備基本方針を提示し、それに基づく整備方針を示すとともに、このような樹林地の持続可能な管理・活用法として、グリーンツーリズムの場としての保全と活用を結びつけた保健休養林の活用を提案した。

4. 桂離宮庭園に見る自然環境の歴史的保全に関する考察

関西剛康 (南九州大学環境造園学部)

本研究では、桂離宮庭園にみる歴史的保全のあり方について、水環境と植栽環境の二つの視点に立脚して検証した。庭園分野の歴史的保全は、周辺の地域環境により成立している関連性が強いので、その環境要因が近代になり変貌すると、庭園を構成する要因も変貌し、再構築されなくなる。これはひとつに限定された庭園敷地内における小エリア管理水準の保全体制では対処しきれない問題であった。また近代社会では安全性が特に優先されるのは仕方ないが、他に景観性、利便性を優先させながらも、都市

レベルでの総括的な歴史的保全活動による歴史遺産としての庭園の位置づけが社会的に必要と考えられた。

5. 姉妹都市サンアントニオ市ボタニカルガーデン「熊本園」竹垣改修工事について

村川辰己 (有限会社むらかわ造園)

1989年に熊本市から寄贈された日本庭園「熊本園」の竹垣等の老朽化が進んだ為、交流事業の一環として竹垣改修工事を行うために、熊本市造園建設業協会より技術派遣団6名の団長として渡航した。今回の作業内容は、あずまやの一部修復・大津垣・桂垣・建仁寺垣・大名垣・計4種類の全長110メートル竹垣工事・マツノキ撤去植え替え等である。限られた工期の中で、多くのトラブルと苦難を乗り越え、無事に完成し、リニューアルセレモニーが盛大に挙行する事が出来たのも、技術団の一致団結はもちろんのこと、植物園スタッフ、日米協会、熊本市関係者、熊本市建設業協会、と様々な方々のお力添えが有ったからこそと感謝している。

6. 熊本県における公共緑化の現状と課題

田中 誠 (熊本県土木部都市計画課景観公園室)

熊本県では、1985年から10年計画で「くまもと緑の3倍増計画」を進め、道路、公園等の公共緑化が飛躍的に進展した。しかし近年では、厳しい財政状況下において、植栽管理費の確保も厳しさを増し、街路樹等の植栽は管理費がかかるから植えないという意見まで聞かれる。このような中で、植栽管理においては、ケヤキのぶつ切り、いびつな樹形の放置、根上がりした植栽柵の放置など、解決しなければならない技術的課題が多く、限られた予算の中で質の高い緑化空間を提供するには、これらの課題への対応策をマニュアル等でわかりやすく解説したり、技術者向けの研修会を開催するなど、積極的な情報発信が重要である。